The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	トーピー・シュクラー
Author(s)	ラーヒー, マースーム・ラザー
Citation	印度民俗研究　別巻. 1984, 2, p. 1-51
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/50353
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

トーピー・シュクラー

ラーヒー・マースーム・ラザー

トーピーの会訳

天野　到

藤原　誠

家本太郎

児玉エデラ

高木圭子

はじめに

この一篇を書き終えたものの、とくに喜びが湧いてこない。自殺は礼節に反するからだ。しかしトーピーには他にてだてがなかった。トーピーとは私であるし、また私に似た他の多くの人達でもある。が、我々とトーピーの間にはただ一つ違いがある。我々はなにかにつけ、折を見ては〝妥協〟する。だからこそ生き存えてもいる。トーピーは別に神でも神の使徒でもなかったのに〝妥協〟しなかった。だからこそトーピーは自殺したのだ。しかしこれは、私の前著『半分の村』と同様、誰か一人のあるいは数人の人物の話ではない。この物語も時代のものだ。その主人公もまた時代である。時代を除いて、物語の主人公とするに足るものはない。

『半分の村』には数え切れぬほどの悪口雑言がでてきた。が、この『トーピー・シュクラー』大師にはそんなものは一言半句だにない。—だが恐らくは、この小説全体が悪たれ口になっているだろう。そして私はこのたわ言を大っぴらにやっている。この小説は下卑たものだ。人生同様。

ラーヒー・マースーム・ラザー

1

「いいな、これで分ったやろ。宗教に政治の息のかかっとるのが？」こういってトーピーは話を終えた。

ところが「いや。」とイッファン。トーピーが論文を読んできかせている間、イッファンはうわの空だった。宗教や政治の他にも、ごく個人的な心配事はあるものだ。で、誰か友達が弁舌をふるっていて、自分一人が「満ちあふるる海」の如き聴衆であるというような場合こそ、そんな考え事をするには恰好の時間だというわけだ。

イッファンの返事にトーピーは渋い顔をした。

「も一回頼むわ。」イッファンがなだめるように言った。

「ほれ、あのダルム・サマージ大学があるやろ？」

「ふん、ある。」

「あれはアグラワール・バニヤー（元来、商業・金融業を生業としてきたヒンドゥーのカーストの一）のもんや。」

「そうだなあ。」イッファンは大いにうなずいた。

「それにバーラーセーニーはバーラハセーニーらのもんや。」

「うん。」

「バーラハセーニーについては、また別の話があるんやけどな。」

「それも聞かせんかい。」

「もとの、正式の名はデゥヴァーダサ・シューレーニーや。けどこのサンスクリット語が通用せんもんやから、奴らすぐさまヒンディー語に写しかえた。ドゥヴァーダサ・シュレーニのバニヤーやったもんが、バーラハセーニー・バニヤーになった。もう今は連中、ムガル時代におのれにどんな名が付けられとったか覚えておらんやろ。」

「けどシュレーニーをセーニーにしたのも、あんまり感心でけんな。これは、全然誤訳というべきや。」こうイッファンがいうと、トーピーはカッとなって、

「これはな、大学の教授とかえらーいヒンドゥーの古典学者とか、イスラム学者とかが訳したんやない。ふつうの人がしたんや。ふつうの人が文法のことになんか気をつかうか？自分の言葉のものさしで、単語を切り揃えるもんや。」

「でも、セーニー（皿）なら食いものがでるよ。」イッファンが言った。

「そらでるやろ。」かっとなったトーピーは歯がみして、「けどな、シュレーニーまでセーニーにさせられてしもうたんや。」と言った。歯がみするほどではなかったのだが、トーピーには自分のまっ白な歯が自慢だった。だからことあるごとに見せびらかすのだった。どす黒い膚に、雪のように白い歯。それは彼のネガ・フィルムで、多分プリントされるのを待っていたのだろう。

トーピーの本名はバルバッドラ・ナーラーヤナ・シュクラーだった。父親の名ときたら更にやっかいだった。そのまた先代になると、トーピーすらき

ちんと覚えていなかった。が、イッファンが「トーピー！お前さんの名前は、れっきとした紳士には発音でけんな。」という度毎にトーピーは言い返すのだった。

「そりゃウルドゥー語紳士の口からは出せんやろ。けどなヒンディー語紳士の口からなら絶対出せるもんや。そちらさんの名前かて、かんたんやなんて誰がいえる？なに、サイヤド・ジャルガーム・ムルトゥジャー・アバディーやて。俺の発音が正しうなかったんは分っとる。けどな俺の言葉はウルドゥー語やないんや。」

この言葉はいつもイッファンを黙らせた。ひとつだけはっきりすることがあった一つまり、もう誰も単なる「紳士」ではいられなくなった事だ。どの紳士にも尾っぽがついている。ヒンドゥー・シャリーフ，ムサルマーン・シャリーフ，ウルドゥー・シャリーフ，ヒンディー・シャリーフ一ついでにビハール・シャリーフ！（最後のものは地名）遠くはるか遠くまでシャリーフの森が拡がっている。こう思うとイッファンはいつも憂鬱になった。が、私はイッファンの憂鬱物語をお聞かせしているのではない。トーピーの話をしていたのだった。彼の名がバルバッドラ・ナーラーヤナ・シュクラーであるということはもうお知らせした。が、人は彼をトーピー・シュクラーとよびならわしていた。

そのわけというのはこうだ。

アリーガル大学は蝿・泥・バターにエンドウ豆の菓子、それからモウルヴィー（回教の学者）で有名だが、さまざまのあだ名をつけることでも知られている。喉の奥深くから出る「カ」の方の〝カー〟先生がいれば、チュヴァーラー菓子先生（どこかの結婚式でふるまってもらえなかったんだろう多分！）もいる。頭痛やみのイクバールもいりゃやくざもいた。A．T。イクバークもいれば、名なしのイクバールなんてのもいた。名なしのというのは、つまり他のイクバールには全員何やかやのあだ名がつけられたのに、この先生に何もつけないと悪かろうから、それで、名なしのイクバール氏と呼ばれ出したのだ。さてまた地理学のある講師にはバハルル・カーヒル一「安穏の海」の名が付けられた。この先生はどんな事にしろ素早くできないのだ。それでのたりのたりした海といわれた訳だ（ちょうどアラビア誤で太平洋のことをバハルル・カーヒルと言うが）。同じ地理学の別の講師は、葉巻のフサイン・ザイディーと呼ばれた。ある時期葉巻に目がなかったものであるから。…バルバッドラ・ナーラーヤナ・シュクラーはこの伝統の一節であった。彼はトーピーと呼ばれ始めた。

ことの次第をお話ししょう。学生自治会で発言するには、きちんと帽子（トーピー）をかぶってすることになっていた。ところがトーピーの意地っ張りときたらいっかな帽子をかぶろうとしない。それだから、彼が何もかぶらず、発言しようと立ち上がると自治会ホール全体から一斉に「トーピー（帽子）！　かぶれ！」の野次がかかった。次第にトーピー（帽子）とバルバッドラ・ナーラーヤナの関係が深まってゆき、ついにはバルバッドラは捨て去られ、トーピー・シュクラーと呼ばれ始めた。それから、仲の良い友人達は

シュクラーなんて邪魔っけをどけてしまい。そこで彼はたんにトーピーとなったのである。

しかし、トーピーはある日ちょっとした活躍をした。自治会の予算会議でのこと、何か異議申し立てをするつもりで、かたわらの学生の帽子をかぶりやおら立ち上った。（帽子はとても大きかった。）と、それを見た学生らはたいそう気を悪くした。

「いんちきめ！」後ろから声があがった。トーピーが発言を始めると彼らは帽子をとらせようと騒ぎだし、結局彼はトーピー（帽子）をとらざるをえなくなった。帽子をとってしまうと例によって「トーピー（帽子）！　かぶれ！」の野次がかかった。そこで彼は再び帽子をかぶり、やっと会場は静まった。しかし彼のこのやり方はおおいに皆の気に入ったので、彼の提出した修正案はすんなり承認されたのである。

トーピーは大層親しみやすい人柄だった。自分の信念はしっかり固まっていたが、その彼が何よりも大切にしていた信念は、友情と信念は別というものだった。

大学入学当時、彼はジャナサング（大衆連盟、反パキスタン・反ムスリム的色彩の政党）党員だった。やがて徐々にムスリム・リーグ支持者になってその結果、ヒンドゥーの学生は彼をマウラーナー・トーピー（マウラーナーはイスラム学者につける称号）と呼び始めた。

アリーガル市内で暴動が起こったときなどは、ムスリムと間違えられ殺されるのを恐れてカトプラーの向う側へ行くのを控えたほどだ。

ヒンディー語を専攻してM．A．（修士）をおえていたが、まだ仕事につけないでいた。

さるQ．A．V．大学（ダヤーナンド・アングロ・ヴェーディク大学。アーリヤ・サマージ系。）のヒンディー語講師の求人広告がひとつ出た。イッファンは新聞の切り抜きをトーピーに手渡して言った。

「申し込」

「何かええことでもあるんか？」

「仕事の口だけじゃまだ不満か。」

「その大学はヒンドゥーのもんや。俺はあかん。」

「ならどこかムスリムの大学にでも当たってみろ。」イッファンが苛立って言った。だが、これまたトーピーにはその気がなかった。

「俺の名前を見てみ、バルバッドラ・ナーラーヤナ・シュクラーや。」

実際これは重大問題である。バルバッドラ・ナーラーヤナ・シュクラーとか、その対になるアンワル・フセインというような名前の人にとって、落ち着ける場所がこの国にありやなしやという問題は。

ここではクンジャラー（八百屋）だの、カサーイー（肉屋）だの、サィヤドだの、ジュラーハー（ムスリムの織物屋）だの、あるいは、ラージプート、ムスリム・ラージプート、バーラハセーニー、アグラワール、カーヤスタ、クリスチャン、シク教徒など要するに皆、大小の違いはあれ、居場所はある。だが、ヒンドゥスターン人つまりインド人はどこに行けばよいのだ？真面目

なとらわれのない人がヒンドゥーになったりムスリムになったりするのには、職の見つからぬことも手を貸しているのではなかろうか？

「政治ちう野郎は宗教ともつるんどるんや。」トーピーは不機嫌に言った。

「いつの世も宗教は政治の一形態やった。　お前はソームナートの寺院を建てられやせんし、わしかてデリーのジャーマーモスクなんか建てられへん。それやのになんで宗教がお前やわしのために力を授けてくれるんや」

「結婚したろかと思うとるんや。」トーピーが言った。

イッファンはトーピーのめでたき（或いはめでたくもない）結婚のことを話そうなどとは考えてもいなかったので仰天した。

「なに言うとるんや？」

「冗談やのうて、」トーピーが答える、「もうこれしか解決策は残ってへん。ここはひとつ結婚して、フィル（それから）、このうっとしい世間を眺め直したろうと思うんや。」

「フィルやない、ピルやろ。」

「何にもパラクー違わへん。」

「パラクやない、ファラク。」

「ああ、せいぜい言葉に媚びとったらええのや。」トーピーは機嫌を損ねた。「俺が自分の結婚のことを言うとるのにあんたさんは言語改良計画いざ進めん！やからなぁ。」

「でも結婚て、誰とするつもりや。」

「それが分っとったら相談なんかせんよ。」トーピーは相当腹を立てた。「そちらさんも時々えらく抜けるね。」

「なら、娘をつくろか。」

「それで何になるねん。そちらさんの生んだ娘とは結婚やなんてできん。」

「ほしたら？」イッファンがたずねた。

「誰かに夢中にさしてくれんかなぁ。」

「お前をかな？」

「そうや。」

「そういう事ならこっちがしたい。」

「あのなあ、冗談もほどほどにしてくれ、奥さんがいてはるのに恋やなんて！」

軽口に気分を害したトーピーにイッファンが言う。

「まあまあ、バルバッドラ・ナーラーヤナ・トーピー・シュクラー先生、恋をするのに女の子はいくらでもおるよ。けどもお前を好いてくれる娘がそのままお前と結婚するとは限らへん。恋は心でするもんやけど結婚は給料とするもんや。給料次第やな、嫁はんも。」

「へえー、そんならライラーとアジュヌーンやヒールとラーンジャーの恋物語は嘘っぱちかいな。」

「そういうんは、中産階級のできる以前のことや。」イッファンは言った。

「つまり政治の奴、人の恋愛にまで手え出しおったんやな。どうやらもう発

音したやろ今、イシュク？」
「うーん、もうちょっとやな。イのところが。」
「やれ、また俺が言葉を乱しとる、とにらむつもりやろう。」
「いや、もうせん。」
「なら恋をさしてくれ。それも誰かムスリムの女の子となら言うことなしや。」
「なんで？」
「彼女を連れてパキスタンに行ってしまうのや。ところで三ルピーある？」
「金？」イッファンはまた仰天した。
「そうや金や。」
「金をどうするんや。」
「こりゃまた、随分と鈍うなってしもうたんやな。」とトーピーは嘆かわしそうに言った。
「金は使うもんや、他にどうするねん。」
「トーピー！」と声がしてイッファンの妻のサキーナーが入ってきた。「うちで御飯食べてゆきなさいな。」
トーピーは立上って、「やれおそろし。俺をヒンドゥーの道から踏み外させんと気が済まへんみたいやね。俺はムスリムのお宅では食事はいただかんて、何べん言うたらええんやろ。」と言った。イッファンは気を悪くして、
「何で食べへんのや。随分と進歩的な筈やろ。」と言う。
「そうや。けどこれがならいになってるし…。そうでのうても家に戻っても台所に入らせてもらわれへんのに。お袋さんは俺の皿だけ別にしよる。けがれたいうて。そうはいうてもお袋さんや、ついつい傍にきて可愛がってくれる。ほんであわててガンジス河に沐浴にいくんや。いっぺん言うたってんムスリムの人らが散散沐浴したんやからガンジス河はけがれてしもとる、て。そしたらえらい怒って、半年も口きいてくれんかった。」
「お父さんはどうなん？」と、サキーナーは腕まくりしながらイッファンの椅子の肘に腰をおろし、ショールで額の汗を拭いはじめた。
イッファンは筆をおいた。これから何時間か、仕事にならないのははっきりしていた。
サキーナーとトーピーとは深い友情に結ばれていた。が、二人は一分たりとて仲良くしないのだった。サキーナーは、ヒンドゥーに対して恨みを抱いていた、というのも、彼女の家族はインド独立時の印回教徒の衝突で殺されていたからである。
サキーナーが口をひらいた。「トーピー、うちはそちらさんのことよう分ってるのよ。こんなとこに坐ってなんとかテキになったって…」
「進歩的。」とトーピーがおしえてやった。
「はいはい、しんぽテキかしっぽテキか知らんけど、こんなけったいな言葉口にすると舌が尻軽女みたいにくねくねしてくるわ。」
「つまらんことば遊びはええから話を続けてくれんかな。何事やったかな

？」とトーピーが尋ねた。
サキーナーは椅子の肘からぱっと立ち上って言った、「あんたなんかなにも怖くないんだからいわれんでも云うわ。一あんた、ここではしんぼテキになっとるつもりやろうけど、一皮むけばやっぱりヒンドゥーやないの。」
「あれ、俺、ムスリムになったなんていつ言うた？多数派を離れて少数派につくなんてそんなあほと違うわ。」
「あんた、ジャナサングのまわしもんやな！」
「とにかく、いま3ルピー要るんやけどなあ。」
「3ルピーなんかあらへん。」
「5ルピーでもええよ。」
「ほんにな、お父さんのなにやらナーラーヤナ・シュクラーさんはうちの庭に金のなる木を植えはったもんな、今年はよう実がとれたし。」
「うわー、カマール（大ごと）や。親父さんそんなこと俺にいうてもくれなんだ。」
「お前がカマール（大ごと）や言い始めたほどの大ごとでもないわ。」とイッファンが言った。
サキーナーは笑って、ふところから5ルピー札を出し、トーピーの方に差し出した。
「はいどうぞ。けど働くようになったらすぐ返してや。」
トーピーは立上がりながら言った。「借用書かこうか。利子つきで一銭一厘まで返します。いうて、それで、また金欠状態になったら、職みつけてな。」
サキーナーがこれに何か返答しようと考えている内にトーピーは行ってしまった。
これがこの小説の主人公バルバッドラ・ナーラーヤナ・シュクラーである。
伝記や小説はどこからはじめても構わないものだ。人生と同様、小説の始まりにもさしたる意味はない。意味があるのはいずれにせよ結末である。バルバッドラ・ナーラーヤナ・シュクラーが黒き肉塊の如く揺藍にあり、おぎゃあおぎゃあ泣いている、黒紐の帯をし、額に魔除けのため墨のティーカーがつけてある、と書いたら、読者諸兄は、こんな赤んぼに興味なんかない、とそっぽを向かれるかも知れない。ところが実際には、どの小説もどの伝記もこういうところから始まるのである。

2

世のすべての大小の人の様にトーピーもまた名もなく生れてきた。名が要るのは死にゆく人ばかりである。ガンディーも名なくして生まれ、ゴードセー（ガンディーの暗殺者）も然りである。だれも生を受けるのに名を必要としない。生れた時はただ子であるのみだ。ところが死ぬ時には、ヒンドゥー，ムスリム，クリスチャン，無神論者，インド人，パキスタン人，白人，黒人…、一体どれだけの名を背負い込んでいくことか。
だが、ここでこういった対立について口を差し挟む積りはない。今は、ト

ーピーが生れたということを知って載ければ充分だ。ほかの何千何億の次男坊と同じく彼もまた次男だった。男三人兄弟のまん中である。

トーピーの生れた晩は、雨期の、蒸し暑く暗い晩だった。風はそよとも吹かず、雲が重く垂れこめていた。星影は全くなかった。

母親の陣痛がはじまると、外では稲光がして、黒い雲に亀裂が走った。とバケツの水をひっくり返した様な雨がきた。まるで雲が軒に懸かっているようだった。庭先に溢れた稲光が映った。ヒューズがとび、まっ暗闇になった。

生れようとする前にこうも荒れをよぶとはどんな悪魔が出てくるのやら分ったものでないと姑はクリシュナの名を唱え始めた。父親の、青油のドクトル・グリグ・ナーラーヤナ・シュクラー氏もはらはらしていた。こんな嵐では産婆も女医も来られない。

そこで、パンディト・バルバッドラ・ナーラーヤナ・シュクラーはきっかり零時に自ら生れ出ることとなった。生れおちるとすぐその小さな瞳でこの世を見た。目に入ったものはいと恐ろしげだった。かれはおびえて哭き出し、それまで身をたゆたわせていた闇を探そうとした。しかし歴史と時間の車輪は逆には廻らない。トーピーはこの世にとどまらざるを得なかった。光が命とりになることも事実ではあるが、それ故、年寄りは産室に光も風も入らないようにしていたものだ。（今日でも、お婆さん方の力の強いところでは、そのようにしている。

エヴァがアダムに小麦をふるまって、可哀相にその罪で楽園から追放されたというのは間違いである。それに楽園のあの樹も、人類学者らの言うような欲望の樹ではない。あれは光の樹だ。奴隷制と宗教は光と古くから対立していた。アダムが光を得たので、即、神さんは楽園から追放したのだ。

光の樹のことは昔の物語にも見えている。色々な学派の占い師や学者達は占いをたて、成る程王子様は幸運に恵まれておられるが、１４才になるまで月や陽の光を受けてはなりませぬと予言した。さてそれから？きれいに整えられた庭に厚手の天蓋だか大テントだかが張られた。王子様はその乳母を始め、あれこれの侍女に下女…いってみれば宮殿中のにぎわいをすべて従えその庭に送り込まれた。１４年目の終わろうとするある日、王子はなにか輝くものが天井から生えてきて地面に届いているのを見た。この逆さまに生えた木はほかでもない。光の樹であった。光が大テントに穴をあけたのだった。さあ、王子が光の樹を見てからというもの困ったことが続出し始めた。「自然が超自然的現象となって現われたので、反自然的な環境で育った子供は自然にぶつからずにはすまされなかった。が結局自然は自然の本領を発揮したのだった。大変な難儀がふりかかったが、王子は光を手放そうとはしなかった。王子は愛する娘と結ばれ、物語は幕を閉じる。人類の祖先アダムの物語も全く同様のものである可能性はある。楽園の大テントにも穴があいたのかも知れない…。年老いた皇帝は王子の帰りを今でも待っている。なぜなら物語はまだ終わっていないから。今頃王子は病棟だの水爆だの、あるいは黒人対白人またはヒンドゥー対ムスリムの衝突といった名の森の中で道を探している

のだ。

しかし我らがバルバッドラ・ナーラーヤナ・シュクラーはアダムでも王子様でもなかった。だから彼は悪魔も占い師も恐れなかった。彼はただ単に青油のパンディト・ブリグナーラーヤナ・シュクラー氏の次男であった。まさにこの「ただ単に」というところにトーピーの人生の悲劇があった。実を言えば、この物語は正にそういう「平凡でありきたり」をめぐる話なのである。

青油のドクトル・パンディト・ブリグ・ナーラーヤナ・シュクラー氏のことを近隣の人たちは立派な紳士だと考えていた。随分と信仰の篤い方で、寺へはたまに参拝にしか出向かず、プージャーも時折なさる程度だったが、町に壮麗な寺院を建立された。ドクトルには、たった一つの趣味があった。それはなんと選挙にでることだったのだ。いつだって落選なのだが気力は倍増、あらゆる選挙戦に出馬しつづけた。はじめ国民会議派の公認候補として出馬した。落選。無所属で立候補して、落選。ジャナサングの公認候補としても出馬したが、やはり、落選。国会議員選挙から市会議員選挙に至るまで立候補したが全て落選。こんなによく落ちる男も珍しい！

ドクトルはペルシャ語の愛好者でイランのマウラーナー・ルームに傾倒していた。またいつもウルフとかベーディルといったペルシャの詩人の詩を口ずさんでいた。洗練されたウルドゥー語を話すくせにウルドゥー語は頑として認めなかった。インシャー・アッラー（神様の御影で）とか、マーシャー・アッラー（ご立派）、スブハーン・アッラー（よくやった）などといったウルドゥー語のいいまわしを口癖にしていた。そしてムスリムのことは憎んでいた。しかしそれは、かってムスリムがインド古代文明を破壊したためでも、パキスタンを建国したからでもなかった。じつは赤油のドクトル・シェーク・シャラフウッディーンが商売敵だったからなのだ。このシェーク・シャラフウッディーンは青油氏に雇われていた薬剤師だった。それで氏の子供達は彼をシャルフーおじさんと呼んでいた程だった。ところがこのシェーク・シャラフウッディーンときたら、あろうことか油の色を変え、それだけのことでドクトルになりすました。そして、ドクトル様を信じて疑わない純情な大衆を両手でもって搾りあげ始めた。…それにしても、色を変えることで、人間はいかに変わることが。かぶる帽子は一つだが、白なら国民会議派の支持者とみられ、赤なら民主社会主義者、サフラン色ならジャナサングの支持者だと見られるのだ。

それでもドクトル・ブリグ・ナーラーヤナ氏の商売は繁盛していた。青油は血管・筋肉に効果があった。ところで最近の若者は血管や筋肉の病気が多いのだから丁度いい。青油はふにゃふにゃの筋肉を剣のように堅くしてくれる。（ところで赤油も同じ効用があった。）そういう訳でドクトル・ブリグ・ナーラーヤナ氏の家は、アラーのご慈悲でというかヒンドゥー教の神（バグワーン）のご加護でというか、奥さんに四人の下女と二人の下僕、水牛一頭に二匹のアルセシアン犬、自動車一台、そして三人の子供に恵まれていた。

しかし、ブリグ・ナーラーヤナ氏はこの小説の主人公ではない。先生につ

いて語らずして、パンディト・バルバッドラ・ナーラーヤナ・トーピー・シュクラーがいかなる人物であるから知ることは容易ではないとの理由から、敢えて紹介している次第である。

トーピーの母ラームドゥラーリーは、素朴で信心深い、家庭的な女だった。兄のムネーシュヴァル・ナーラーヤナ・シュクラーことムンニー・バーブーは、ラーム・ラージャ・パリシャド（ヒンドゥー教色の強い政党）にどっぷりつかっていた。弟のバイラヴ・ナーラーヤナは国民会議派の党員になろうと躍起になっていた。というのもそうなれば裏口からの収入だけでも青油より多いからである。A州の首相がスイスの銀行に500万ルピー残して死んだとか、B州の首相は首相になる前はただのバスの車掌だったのに、今や主要都市には別荘をもち工場をも幾つかもっている。などと聞くと目を輝かしてラームドゥラーリーのそばににじり寄り、言うのだった。

「俺は首相になるねん。」

「神さまのお力は大きいでな、きっとなれるやろ。」母がこういうのを聞くとバイラヴは、自分がいつの日かきっと首相になるであろうことを確信した。ところでバイラヴは父親には胸の内を決して明かさなかった。彼は末子だったので母に可愛がられた。ドクトル氏は長男のムンニー・バーブーに熱心だったし、一方ムンニー・バーブーはムンニーバーイーにご熱心だった。

ムンニー・バーブーは、ムンニーバーイーのりんとしたところがお気に召した。それはまあ、たしかに街の多くの娼婦の一人に違いはなかったが、ムンニーバーイーは、このような職にあっても、道を踏み外さなかった。いつの日か神の審判にあうことを知っていた。だから家の一角にシヴァ神の祠を設けていた。毎朝、沐浴してシヴァの神をナトラージャ，ボーレー・シャンカル，ブートナートなどの名で呼びかけては拝んでいた。そして夕刻、三十二種の化粧をして座敷に出ても、歌を聴きたい者は誰が聴いてもかまわないが、シュードラやムレッチャを「客」にはせぬように気を配っていた。何より悔しく思っていたのは、ムスリムに水揚げされた事だった。ムンニー・バーブーは正にこういうヒンドゥー的生き方を生き甲斐としていた。彼はムンニーバーイーより十歳年下だった。しかし恋に年齢など野暮なことだ。

こういうわけで、ムンニー・バーブーは、自分の結婚話がもちあがるとしょげてしまった。しょげただけでなく結婚などしないと言い張った。ドクトルは頭を抱えた。なぜなら、相手のお嬢さんの家はお得意さまだったから。向うの持参金として現金10万ルピー、自動車一台、5キロほどの金に30キロばかりの銀が手に入るところなのだ。ドクトルは損得を十分勘定にいれた上で、ムンニー・バーブーを考え直させることに決めた。しかしムンニーバーイー以外にはだれも彼の気持ちを変えることはできなかった。二人の別れ話に、ムンニーバーイーは五千ルピーで手を打った。彼女は一年間ボンベイに身を隠した。ドクトル氏は、自分の患者にあててムンニーバーイーの紹介のため手紙も出した。（もと患者が映画俳優になっていたのだ。）ムンニーバーイーが何も言わずある日急にいなくなってしまったので、ムンニー・

バーブーはドクトルの言に従わざるを得なくなった。

パンディット・スダーカル・ラールの一人娘、ラージヴァンティーとムンニー・バーブーは結婚した。

ラージヴァンティーは大変いい娘だった。ただ片目が少し悪く、左足をひきずって歩いた。色はやや浅黒く、顔にはあばたがあった。だがそれが何だろう？ちゃんとした家で嫁の顔の美醜を気にしたりするだろうか？美貌が必要なのは遊女だ。妻というものは気立てが問題なのだ。ラージヴァンティーは気立てはよかった。それに何といってもパンディット・スダーカル・ラール氏の一人娘なのだ。パンディット・スダーカル氏は町一番の弁護士だった。月収12000ルピーほど、その上大地主でもあった。幾つかの機械工場の株主であった。その父親は羽振りのいい警察署長であり、祖父となると、それ以上に豪勢な、収税吏だった。噂によると、パンディットのお宅ではお礼を、まるで穀粒のように日干しするそうだ。パンディットの父と祖父は150軒の店と五軒の邸宅の外に170万ルピーの銀行預金を残した。が、ラージヴァンティーは弁護士の父の何とかできる厄介な訴訟事件というわけにはいかなかった。彼女は見苦しい容姿であったので、釣り合いのとれる人の中から婿は見つからなかった。それ以下の者でさえ、金はあっても片輪の娘に息子をやることはためらった。ただし、一人、青油のパンディット・ブリグ・ナーラーヤナ氏のみは富の女神は富の女神だといってくれたのであった。

ムンニー・バーブーとラージヴァンティーの物語も、トーピー・シュクラーの物語のうちには入らない。要するに私は、あらゆる方向からトーピーを押え込んでいる全ての人々を、読者諸君に知っていただければいいのである。

しかし、どうも話の順序が狂っているようだ。もう、ムンニー・バーブーとラージヴァンティーの結婚の話が何の理由もなく出て来てしまった。パンディット・バルバッドラ・ナーラーヤナ・シュクラーとなり、さらに後にはトーピー・シュクラーとなる子供が、雨期の暗い夜、生れたばかりだというのに。

トーピー・シュクラーの顔かたちは上出来ではなかったものの大層恥ずかしがりだった。丸裸で生まれてはこず、全身毛むくじゃらで生れてきた。そのため、翌朝チャマールの女がやって来てラーイドゥラーリーのマッサージをして家に戻って自分の旦那にこう言った。「せんせのおうちにゃ、猿が生まれたで。」

せめて誰に似たのか知るために、トーピーの双方の祖父母の家はくまなく点検された。しかしこんな事をしても全く訳が分らなかった。さあ、そうなると姑の嫁いびりが始まった。かわいそうにラームドゥラーリーは、この子を産んだがために、とんだ災難に見舞われ、途方にくれた。ただ、救いとなるのは、姑は怒り出すとほとんどペルシャ語で話し始める。ということだった。そうなると、姑が何を言っているのか、ラームドゥラーリーにはわからないからである。

スバッドラデーヴィー即ちブリグ・ナーラーヤン氏の母親はペルシャ語の

愛好者で、ヒンディー語を敵視していた。彼女の父親、即ち青油のドクトルの母方の祖父パンディット、バーラムクンドは、ペルシャ語とアラビア語の学者であり、ウルドゥー語とペルシャ語の詩人であった。スバッドラーは一人娘だったので、パンディット・バーラムクンドは彼女に思う存分ペルシャ語を教えた。スバッドラーデーヴィーは、秘かにペルシャ語で詩も作るようになった。嫁ぎ先も、ペルシャ語が話される環境であった。ドクトル・ブリグ氏の父親からして、ウルドゥー語とペルシャ語に夢中だった。スバッドラーデーヴィーは、家の召使いらには秘密にして話したい時は、夫にペルシャ語で話し始めた。この夫婦の考えでは、ヒンディー語は粗野なことばだった。

かわいそうにラームドララーリーには、姑が家庭内で使うことばすらよく分らなかった。彼女の家の学問的伝統はまた少し別のものだったのだ。しかし兎に角、姑が孫の誕生を喜んでいないということだけは、彼女にははっきりとわかった。

彼女は恐る恐る子供に目を向けた。子供は相変らず醜い顔をしていた。ひどく黒目と白目のはっきりした目で天井の方を見ていた。

姑が口がすっぱくなる程聞かせた嫌味のせいで彼女の乳まですっぱくなった。すっぱくなったかどうかはともかく出なくなった。

彼女はさまざまな乳製スープを飲まされ、いろいろなハルウァー菓子やラッドゥー菓子を食べさせられた。数々の呪術がとり行なわれた。イスラム教の聖者達にとりいった。アゴール派の行者に呪文をとなえてもらった。苦行者達の足元にひれふした。それでも乳は出なかった。

一方、トーピー・シュクラーが愛らしい顔をしていないので、ムンニー・バーブーは、以前にも増して株があがった。家に来る品物はまずムンニー・バーブーの手に入った。衣服もムンニー・バーブーがまず着て、トーピーはそのお下がりを着なければならなかった。スバッドラーデーヴィーは、トーピーを側に寄せつけさえしなかった。もしトーピーに触れでもすれば、チャンパィーの花のように明るい色をした自分の肌にしみができると恐れていたのだろう。ところがムンニー・バーブーはいつでも祖母の膝に抱かれている。時には祖母はムンニー・バーブーに、『薔薇園』の物語を聞かせている。時には「ティラスメー・ホーシャルバー」を楽しませている。『ラーマーヤナ』を語ってきかせている時もあるし、『マハーバーラタ』の英雄伝を暗誦させている時もある。

我らがバルバッドラも心の中では、誰かが同じように愛情をこめて話をきかせてくれれば、と思っていた。しかし、彼は誰からも全く相手にされなかった。何かをねだる度に、「なんて厚かましい子やろ、兄さんをうらやむやなんて。」と叱られた。

その結果、トーピーは、シェーク・サーディーやアミール・ハムザーの物語、ラーマーヤナ、マハーバーラタ、そして大人達に嫌悪を感じるようになった。これらすべては、ムンニー・バーブー側のもんだと思い始めた。ある日、トーピーはとんでもないことをしでかした。祖母にこう言ったのだ。

「なあ、おばあちゃんはあの真っ黒いクリシュナを拝んではるんやろ、そんなことしとったら、いつかジャルール（ちっと）おばあちゃんのブージャーは黒うなってまうよ。」と。

その日、祖母は、二つの事柄に腹を立てた。一つ目は、孫が「きっと」（ザルール）を「ちっと」（ジャルール）と発音したこと。（トーピーは祖母をからかうために、祖母の存命中ずっとそうしていた。）二つ目は、孫が神を笑いぐさにしたことである。祖母は、いやみの限りを尽くしてラームドゥラーリーをやりこめた。その日、ラームドゥラーリーはトーピーをいやというほど叩いた。

そこでトーピーは家から逃げ出した。

3

しかし、何の考えもなしに家出の決心をしたわけではない。六歳時分の子供の頭に考えられることは考えたのだ。たとえば食事をどうするか、夜どこで寝るか。など考えてはみたのだ。しかし案ずることなどあったろうか。家で御飯を食べればいいし、自分のベッドで寝てしまえばすむことだ。決心するのに数秒とかからなかった。それだから、トーピーが家出して来たことを知った大人は皆、異口同音に、よく考えもせず馬鹿なことをするものじゃないと言い聞かせるばかりだった。

しかし、私（つまり作者）は知っている、トーピーが、一度たりとも考えなしには行動しなかったことを、正にこのことが後年彼の悲劇の原因となったのだが、それは読者諸氏がこの物語を読み進むうちにおのずとお分りいただけよう。

それはさておき、ラームドゥラーリーがトーピーをさんざん打ち叩いた日、得失を十分考えたうえで、トーピーは家から逃げ出す決心をしたのである。もし彼の家出がなかったなら、今頃私はこの伝記をかいてはおるまい。この家出は、彼の人生上特筆すべき出来事だった。というのは、このためにイッファンと出会うことが出来たからである。

彼は逃れ出た。しかも単に家からだけでなくその家のある一画から逃れ出たのだ。そこを出て、まず目にしたのは、一人の子供を二人の子供が殴っている光景だった。一たす一が二になることくらいは彼も知っていた。それで彼は一に一を足してみた。

喧嘩がおわると、シャツはびりびりに破れてしまっていた。膝はすりむき、顔は爪のひっかき傷だらけだった。イッファンも同じ有様だった。しかしトーピーとイッファンにはひとつ違いがあった。イッファンは一人息子だったが、トーピーは三人兄弟の真ん中だったのだ。こんなことは口で言っても何もぎくりとさせられはしない。この苦しみは次男である人にしか分らない。実をいえば私がこの伝記を綴っているのは、世界中の次男坊が利益を享けんがためであり、もしできることなら、何か「国際次男連合」でも設立してその諸権利のための闘争開始を願ってのことなのである。もし黒人・白人、或

いはヒンドゥーとムスリム、など、要するに人がみな平等であるなら、次男が長男と等しくないなどということがどうしてありえよう。「次男擁護協会」でも作られていれば、私はこんなうんざりする伝記など書かなくても済んでいたろう。しかしこの国ではそんな運動はありもしない。動物愛護協会は一束いくらで売る程できているのに次男坊たちは虐待されている。神のアヴァタール（化身）だって皆長男だ。誰か次男坊の化身でもいたら教えていただきたい。ラクシュマナやバラタのような長男以下の兄弟たちはラーマの威光に圧倒されて、影も形もない。弟たちは皆、いわば、サポーティング・カースト（下層階級）なのだ。読者諸賢よ、とくとご覧になって載きたい。イッファンは長男だったがために自分のシャツが裂けていても何も心は痛まなかった。だがトーピーは、びりびりになったシャツを見ると血の気がひき、肘や膝、それに顔から血の出ていることなど忘れてしまった。

トーピーは泣き出した。

「けが、ひどいん？」

「ううん。」トーピーは言った。「これ見たらわかるやろ。シャツがやぶけてしもたに。」

「おいでよ、新しいシャツを着せてあげる。

「な、なんでそんなしゃべり方しとおん？」

「ぼくふつうにしゃべっとるだけやよ。」

ふつうに喋っている事は分っていても、トーピーには、彼がどうしてその喋り方をするのか飲み込めなかった。これは他ならぬ祖母の話し方だった。こいつもおばあちゃん側の奴やと彼は思った。

「あんた、うちんくのおばあちゃん知っとおやろ？」彼は尋ねた。

「ううん、知らん。」

「ほでもおばあちゃんみたいなしゃべり方しとおやんか。」

イッファンは吹き出した。「たぶんその人ラクナウの人なんやわ。」

「そんなこと知らん。」こういって話が途切れたものの、どうも気持ちがすっきりしない。ラクナウの人は皆、おばあちゃん側の人だったらどうしょう。

「おいで、ぼくの家においでえな。」イッファンが言った。「ぼくの自転車見せてあげるよ。それで何ていう名前？」

「そのラクナウてどこにあるん？」

「こっから遠いよ。」

トーピーはそれを聞くと少し安心した。ラクナウの人がみなおばあちゃん側の人でも、遠くにあるからには何も心配は要らない。

「バルバッダル・ナラーエンいう名前やけど。」

「ぼくはイッファン」

「そんな短いん？」

「ちがう。これは家で呼ばれる名前やねん。」

トーピーはしゅんとした。自分には家で呼ばれる名前が無いということが

たまらなく淋しかった。しょっちゅう呼ばれることがなければ家庭での名前などできないのだ。トーピーは人から呼ばれたことすらなかった。

「自転車持っとおん！」彼はきいてみた。

「うん、昨日来たんや。」

「ピカピカ光っとお？」

「うん。」

トーピーはイッファンの家まで来ると声もなくなってしまった。随分変わった住まいだと思った。くねくね曲った鍋、釜、皿から家の人の着ているものまで、見るもの全て初めてみる変わったものばかりだった。

「誰かね、この子は？」年とった女が聞いた。

「なんやらナーラーヤンゆうねん。」

「バルバッダル。」トーピーが付け足した。

「どこの子かね？」若い婦人が尋ねた。あとで、この人はイッファンの母親だと知れた。

「ドクトル・ビルグ・ナラーヤンとこの子です。」とトーピー。

「青油のドクトル・ビルグー・ナーラーヤンさんかね？」こう、大層にこやかな男が聞いた。この人は後でイッファンの父親だと分った。

「はい。」

「イッファンぼん（ミャーン）や、何か出してあげたらどうや？」彼は言った。と、トーピー、イッファンに向って、

「あんたミャーンなん？」ときいた。

「ミャーンがどうかした？」イッファンは腹を立てた。

「あんたムサルマーンなん？」

「そっや。」

「ここにおる人らは？」

「これはぼくのアッブー（父さん）、それにアッマーン（母さん）とダッダー（家政婦さん）や。」

「そんなこと聞いとらんよ、ここにおる人らはミャーンなん？」

「そうだよ。」イッファンの父親が微笑んで言った。「みんなミャーンや。」

「ほんならここじゃよばれられんわ。」

「なんで。」イッファンが尋ねた。

「ミャーンの触ったもんは食べん。」

「なんで食べへんの？」

「ミャーンの人らはすごう悪いやろ。」

家の者は何とかトーピーにものを食べさせようとしたが、彼は頑として受けつけなかった、もっとも、イッファンの小さな自転車を見て大いに喜んだのではあるが。

「これ誰にもろたん？」

「チャッチュー（おじさん）が外国から持って帰ってくれてん。」

「外国てどこ？」

イッファンもそこまでは知らなかった。だが知らないとは言いたくなかった。そこで彼は聞こえなかったふりをして自転車を漕ぎ始めた。ニッケル塗装された車輪の輻がピカピカまぶしく、トーピーも問いを忘れて自転車の後を駆け出した。

こんな風に二人は下男が呼びに来るまで時のたつのも忘れて遊んでいた。

「坊っちゃん、御飯だから帰っておいで。」

「行こ、一緒に食べようや。」イッファンはトーピーに言った。

「いいや、食べられん。」

「ミャーン(ぼん)、ぼんはお戻りになりなはれ。家でも御飯で、ぼんを待ってはるやろから。」下男は言った。

「ミャーンやないよ、だ。」

下男はイッファンを連れて帰った。トーピーは種々の果樹の植わっている広い邸内に一人取り残された。彼は木の根方に腰を下ろし、それにしてもどうして自分には自転車がないのだろうかと考え始めた。兄ちゃんのムンニーですら自転車を持っていないのだから不思議だ。兄ちゃんのムンニーに、ぼくの友だちは自転車を持っとるんや、チャッチューが外国から持ち帰ってくれたんやで、と胸を張ってやれば、兄ちゃんくやしがるやろうなあ、彼はそう考えてにやにやした。しかしチャッチューて何のことやろか。いいわ、何でも、とにかく友だちが自転車もっとることには変わりないんやから。一

こうしてトーピーは秘かにイッファンを自分の友達にしてしまったのである。それでもう有頂点になってしまい、家を飛び出したことなど忘れてしまった。お腹が空いていたので彼は家をめざした。しかしトーピーが家に着いたとき家の中には張りつめた静寂が漂っていた。ラームドゥラーリーに三人目の赤ん坊が生まれようとしていたのだ。

「弟と妹と、どっちがええ?」一人の下女がきいた。

「自転車は無理なんやろか?」トーピーはたずねた。

老いた下女は腹を抱えて大笑いし、若い下女二人にもこの事をきかせてやった。するとその二人も哄笑した。トーピーは傷つけられた思いだった。

のちにこのことは祖母のスバッドラー デーヴィーと母のラームドゥラーリーの耳にも入った。ラームドゥラーリーは微笑んだが、祖母の方は、格調高いウルドゥー語でトーピーのあほうさ加減を嘆いた。しかしトーピーが自転車を一台欲しがっていることには誰も注意を払わなかった。こうして結局誰一人その事を考えてやらなかったのでトーピーはイッファンの方に引かれ始めたのである。

仰せとあらば、今ここでイッファンに就いて、ついでに話しておこう。読者をとまどわせるようなことは、小説や伝記の作法に反する。読者と顧客の間に違いがあるように、作家と商人の間にも違いがある。商人は品物を売らねばならないので、推理作家と同じく、物事を話したり話さなかったりする。しかし、作家には売るようなものは何もない。小説の構成がしっかりしておれば読者に嘘をつく必要などあろうか。私は、トーピーの物語を推理小説

の様にはしないでお聞かせしたいのだ。何故なら今は、トーピー・ガーター・カール、すなわちトーピー讃歌時代だから。今は低俗な時代である。「人物」の生まれてこない時代である。「美」にはあちこち汚れがついている。英雄讃歌のときでもないし、文学的恋情を味わうときでもない。如何なる世も末法の世ではない。しかしトーピーの時代は確かに始まった。故に、読者におのれの時代を紹介し、このあわただしさの中、おのれが何処に立っているかをお話しすることは、作家の義務である。

クリシュナはアルジュナに、我こそ万有一切なりと言った。私はクリシュナではないが、私こそトーピーでありイッファンであると言う。私こそムンニー・バーブーであり、バイラヴでもある。私はこの時代であり、皆さんに自分の紹介をしている。— 私は作家であり、かつ読者である。そして作家の私が、読者の〝私〟にイッファン紹介の許可を求めているのである。

イッファンはトーピーの生れてはじめての友だちだから、イッファンについても多少知る必要がある。このイッファンを、トーピーはいつもイッパンと呼んだ。イッファンはこのことをよく思わなかった。しかしイッファンは、イッパンと呼ばれても口をきいた。この様に口をきく処が彼の偉いところだった。この名前というやつもやっかいなしろものだ。ウルドゥー語とヒンディー語は一つの言語すなわちヒンダヴィー語の二つの名前である。ところが名称を変えるだけでどんなに面倒が起こっているか、読者でお見おき載きたい。名がクリシュナならば神の化身（アヴァタール）だという。ムハンマドであれば神の使徒（パイガンバル）だ。名称にまどわされて、人は、このどちらもが牧人であったことを忘れてしまった。どちらもパシュパティ、すなわち牧者、牧童、獣主でありゴーバルダンでありブラジ・クマールであった。こういう訳だから、トーピー抜きのイッファンあるいはイッファン抜きのトーピーは不完全というだけでなく無意味だというのだ。だから、イッファンの家にぜひとも行かねばならない。その魂の中庭にはどんな風が流れているか、伝統の木にはどんな実がなっているかを見なくてはならない。

4

イッファンのことも話せば長くなる。でも私達はトーピーのことを語り、聞いているのだから、イッファンのこと全部は話さずトーピーに関わって必要な分だけお話しすることにしょう。

それというのも、如何なる小説にしろ、決して誰がある人についてばかり話すわけにはいかないからなのだ。作家がこれを忘れてしまうと、主人公を目立たせるために他の登場人物を上からまた下から削りだす。主人公を遠くから眺められるように、しかし小説というものはまた別である。小説は決して誰か二人のものではありえない。小説はあらゆる人に関わるものではあるが、一貫性は崩れない。

この小説の主人公は確かにトーピーである。しかし、この小説、伝記といってもいい、はトーピー一人のものではない。これは、この国、いやこの世

界の物語のスライスなのだ。スライスはパンから切ってもパンにちがいない。それ故語り手は注意を払わねばならない。自分の好みで人を生かしたり殺したりは出来ない。プレームチャンドは『カルマブーミ』の人物アマルカーントとサキーナーを結ばせるわけにはいかなかった。なぜならその小説はインドの生活のスライスだから切り離されはいても、その一部である。プレームチャンドの時代、アマルカーントとサキーナー、ヴィジャヤラクシュミーとサイヤド・ハサンの結婚はありえなかったのだ。

こうして、イッファンはこの小説のほうぼうで顔を見せるであろうから彼について少しお話ししないでは済ませられぬ、と私は判断する。トーピーはイッファンの影ではないし、イッファンはトーピーの影ではない。この二人は互いに独立した人格である。この二つの人格は無関係に形成された。この二人は、それぞれ別の家庭環境のもとに生れた。この二人は人生に関して別様に考えた。それでも、イッファンはトーピーの話と不可分である。そしてこのことは非常に重要なことである。私はヒンドゥーとムスリムは兄弟だ、仲良くしょうなどと云っているのではない。なんでそんな馬鹿らしいことをしよう！自分の兄弟に向って、毎日ぼくらは兄弟、なんて言うだろうか？私は言わないが、ならあなたはおっしゃるか？本当にヒンドゥーとムスリムが兄弟の様であるなら、そんな事を口に出して言う必要などありはしない。仲良くないなら、口先だけで言ったとて何が変わろう？私は別に選挙にでるわけではない。私は一介の作家であり、物語を話しているにすぎない。私はトーピーとイッファンのことをお話ししている。彼ら二人はこの小説の登場人物である。一人の名はバルバッドラ・ナーラーヤナ・シュクラー、そしてもう一人はサイヤド・ザルガーム・ムルトゥザー。前者はトーピーと呼ばれ、後者はイッファンと呼ばれた。

イッファンの父方の祖父、曽祖父は高名なイスラムの学者だった。カーフィル（不敬の輩）の住む国に生れ、カーフィルの国で死んだが、遺体をカルバラー（イラクにあるイスラム教徒の聖地）に持ってゆくように遺言した。この国では二つの魂はついに一度たりとも空気を吸うことがなかったのだ。その家系の中で初めてヒンドゥスターン人として生まれた子供は、のちのイッファンの父であった。

イッファンの父、サイヤド・ムルトゥザー・フサインも、ヒンドゥーの触れたものは口にしなかった。しかし臨終のとき、遺体をカルバラーに持っていくようにとは遺言しなかった。彼は、ヒンドゥスターンのある墓地に埋葬された。

イッファンの曽祖母も、ヒンドゥーの触れたものを口にしなかった。それは信心深いお方だった。カルバラーをはじめ、ナザフ、ホーラーサーン、カーズマイン、そのほか一体どれほど多くの聖地に巡礼してきただろうか。ところが、誰か家の者が出かけるという時には、どうでも戸口に水差しを置かせて、タチナタ豆で厄除けしないではおかなかった。

イッファンの祖母も礼拝や断食の勤めを欠かさなかった。ところが一人息

子が天然痘にかかったとなると、寝台の側に片足で立ち、「痘癒の神様どうぞこの子をお見逃し下され。」と言ったものだ。東の方（北部州東部からビハール州西部とかけて）の出だった！結婚してラクナウに移って来たときは九つか十だった。しかし、この世を去るまで東部方言をつかっていた。ラクナウのウルドゥー語にはなじめなかった。彼女は実家のことばを大切に抱きかかえていた。なぜなら、どちらを向いても、このことばの他に彼女の心のうちを分ってくれるものはなかったからである。息子の結婚式の日が来ると、彼女は歌や鳴り物を楽しみにして胸をわくわくさせた。しかし、学者の家で歌だの鳴り物だのの余興があり得ようか。気の毒に彼女は気持ちを押さえなくてはならなかった。それだからイッファンのチャティー（ムスリムが、生後六日目に祝う儀式）とムサルマーニー（割礼式）の際には、それはもう思う存分祝いごとを催した。

つまり、イッファンは、祖父の死後生まれたのだった。

男女の間のこの違いを心に留めておかなければならない。それをせずしてイッファンの魂の基底を理解することは出来ないからである。

イッファンのお祖母さんは、学者の娘ではなくて地主の娘だった。牛乳とギーを飲んで育った。ところがラクナウに来てからは、あのダヒーが飲みたくて仕方がなかった。ギーのしみこんだ黒い壷に入って、小作人のところからやって来ることになっていた、あのダヒーが。ただ実家に帰ったときだけは舌鼓を打ちながら心ゆくまで食べた。ラクナウに戻って来ればとたんにまた学者夫人とならなければならなかった。夫に対するたった一つの不満は、夫が四六時中学者でいることだった。

嫁いでからというもの彼女の心は安らぐことがなかった。最期が近づいたとき、息子が遺体をカルバラーに運ぼうか、それともナジャフ（イラクにあるムスリムの聖地）に、とたずねると機嫌を悪くして言った、「わしがいんであんたの手に余るんなら構わんけ里に送ってつか。」と。

死は目前にあった。だから今、里がどこにあるか、ということなどに考えがいたらなかった。里の人たちはカラチにいて、家はもう管理人のものとなっている。しかし死の間際、一体誰がそんな細々したことを思い浮べるだろう。いまはの際には、人は、何よりも美しい夢を見るものである。（これは作者の想像である。何故なら作者はまだ死んではいないから。）だからイッファンの祖母も里の家を思い出した。その家は埴屋敷と呼ばれていた。日干し練瓦を積んだものだったからそう名が付いたのである。それから彼女はダスハリー・マンゴーの、種から育てた木を思い浮かべた。その木は自分の手で植えたもので、彼女と同じようにもう年老いていた。この様に、取るに足らないけれど甘美な数知れない事柄が記憶の底から蘇ってきた。一体どうしてこれらのものを振り捨ててまで地の果てのカルバラーやナジャフに行くことができよう！

おばあさんは、ベナレスのファータマィンに埋葬されたが、それは当時、ムルトゥザー・フサインがそこで勤務していたからである。イッファンはそ

の時学校にいた。下男がやって来て、ビービー（大奥様）が亡くなったことを告げた。イッファンのお祖母さんは大奥様と呼ばれていたのだ。

イッファンはその時四年生で、トーピーとは既に知り合っていた。

イッファンはダーディー（祖母）のことが大変好きだった。アップー（父さん）もアンミー（母さん）もバージー（姉さん）も妹のヌザハトもみな好きには違いなかったが、とりわけダーディーに心を寄せていた。アンミーはときに角を生やすし、バージーだってそうだ。アップーも折々この家を裁判所にして判決をお下しになる。妹の奴ときたら、すきさえあればノートに落書きをする。ひとりダーディーだけは、イッファンの心を悲しませることがなかった。ダーディーは夜になると盗賊バハラーム、石榴の木の妖精、十二の塔、長者ハムザー、グルバカーヴァリー、ハーティムターイー、パンチ・プッラー・ラーニーなどの物語をイッファンに聞かせてくれるのだった。

「だれもかれも寝てしもうたが天の神さんは見守っておいでじゃ。この目で見たわけじゃない。人伝てに聞いた話じゃ…むかしむかしあるところにの、殿さんがおいでじゃった…」

イッファンはダーディーの言葉を笑ったことなど一度もなかった。とても感じのいい言葉に思えた。が、父親はこれを喋らせてくれない。このことでダーディーに不平を言うと、ダーディーは笑って、「わしのことばじゃなんぞ！学のなぁ田舎もんの真似するこたぁないわいね。お父さんの言葉をしゃべりんさい。」こう言い、片付けられてしまった。物語がつづく。

「そこで殿さんの言葉はのう、はよう鹿を一頭殺してこい、じゃと…」

この言葉はトーピーにはなじみ深いものだった。イッファンのおばあさんは自分の母の仲間のように思えた。自分の本当の祖母のことは、トーピーは大嫌いだった。しんから嫌いだった。なんという言葉なんだろう。イッファンのお父さんとトーピーのお祖母さんのコトバは同じだった。

トーピーは、イッファンの家に行くと、ダーディーの傍に行って坐ろうとする。イッファンのアンミーやバージーとは、口をきこうとしたことさえなかった。この二人は何かといえば、トーピーの言葉を笑いぐさにしょうとしてつっつくのだ。しかしそれがあまり昂じると、ダーディーが助け舟を出してくれる。

「なして、あん人たちのところに行く、出しゃばった口をききゃぁ打たれるものよ。ほれこっちへ来。…」ダーディーは叱っていうのだが、どの言葉も砂糖のおもちゃになる。マンゴー飴になる。ごま菓子になる。それでトーピーは黙ってダーディーのそばに行くのだった。

「お前のアンマーンは何してなさる？」ダーディーはいつもここから話を始めるのだった。はじめトーピーは、アンマーとは何のことか分らず、どぎまぎした。が、そのうち母親のことだと知れた。

この言葉はトーピーの気に入った。アンマーン。彼はこの言葉を黒砂糖のかけらのように味わった。アンマーン、アップー。バージー。

さあそこである日、ひと騒動もちあがった。

青油のドクトル・ブリグ・ナーラーヤン・シュクラーの家にも時代の波は押し寄せてきていた。テーブルと椅子で食事をした。ターリー（盆）こそ使ったが、チャウキーに坐っては食べなかった。

その日たまたま、なすのブルター（煮物）がトーピーにはことさら美味しく思えた。お母さんのラームドゥラーリーは配膳中だった。そこでトーピーは言った。

「アンミー、なすのブルターもっと。」

アンミー！

テーブル上に動いていた手という手がぴたりと止まった。目という目がトーピーの顔に集まった。

アンミーだと！こんな汚らわしい語がわが家に何だって入って来たのだ！家門の土台が崩れ始めた。アンミーとは！ただごとではない。ヒンドゥー教には法難の危機なのだ。

「そのラフズ（単語、ことば；アラビア語の借用語）はどこで覚えたんや？」祖母のスバッドラデーヴィーが問うた。

「ラフズ？お母さんラフズてなに？」

「アンミーやなんて呼び方を誰がおしえたんや？」祖母がどなるように言った。

「イッファンがそう言っとったから…。」

「その子の名前全部言いなはれ。」

「ようしらん。」

「あんたどこぞのムスリムの子と仲ようなったんね。」と言って、母親のラームドゥラーリーは魂の震える思いがした。

「あんた、わたしの前で田舎弁喋らんといてくれ言うといた筈や。何回言うたら分るんかねえ。」祖母はラームドゥラーリーにむかっ腹を立てて言った。

非難のほこ先が転じた。

第二次大戦中のことであった。青油のドクトルは、トーピーの友達が県長官の息子だと知ると怒りを飲み込み、三日目にはもう、衣料と砂糖の販売免許を得て帰った。

しかしその日トーピーは惨々な目にあった。スバッドラデーヴィーは食卓を立ってしまうし、ラームドゥラーリーはトーピーをまた大いにぶった。

「あんたまたその子んとこに行くん？」

「うん。」

「うんなんて言うとなんもかも台無しになるでしょうが。」

…ラームドゥラーリーはくたくたになるまで体罰を与え続けた。がトーピーはイッファンの家に行くのをやめるとは言わなかった。ムンニー・バーブーとバイラヴは、トーピーがひっぱたかれるのを面白そうに眺めていた。

「こいつ、いつかラヒームの焼肉屋でカバーブ（焼肉）食べとるんを見たよ。」ムンニー・バーブーが口をはさんだ。

焼肉だなんて！

「ひゃー……」ラームドゥラーリーはぞっとして後ずさりした。トーピーは兄の方を睨みつけた。本当は逆なのだ。トーピーの方が、焼肉を買い食いしているムンニー・バーブーを目撃し、兄は一アンナの口止め料をくれたのだった。ムンニー・バーブーが煙草を吸うこともトーピーは知っていた。しかし告げ口はしなかった。彼は今までイッファンの他、誰にもムンニー・バーブーのことなど話したことがなかった。

「えっ、兄ちゃんはぼくが焼肉を食べとうのを見たんやて？」

「そんなことない言うんか。あの日？」

「ならその日なんで知らさなんだんじゃ？」

スバッドラデーヴィーが尋ねた。

「そんなん嘘や。おばあちゃん！」トーピーが呼んだ。

その日トーピーは悲しくて気分が悪かった。どちらが嘘か本当か言い争うことができるほど大人にはなっていなかった。一それに本当をいえば彼はいつまでたってもそれほど大人にはなれなかった。うち叩かれて体中がずきずきと痛んだその日、トーピーの頭の中にはずっと一つのことしかなかった。一日だけムンニー・バーブーより大きくなれたら、兄貴をうんと懲らしめてやる、という事しか。しかし兄より大きくなるのはどうにも無理だった。トーピーはムンニー・バーブーの下に生まれてきた以上、兄より年下でしかいられなかった。

翌日学校でイッファンに会うと、トーピーは何もかも話して聞かせた。二人は地理の時間をさぼって抜け出した。パンチャムの店でイッファンはバナナを買った。トーピーが、家の外では果物以外には何にも手をつけなかったからである。

「ぼくらおばあちゃんを取りかえっこできんのかなぁ。」トーピーが言った。「そっちのおばあちゃんがうちんくに来て、うちんくのはそっちに行くんや。うちのおばあちゃん、ことばがあんたとこの人らとおんなじやもん。」

「それはあかん。」イッファンが答えた。「父さんが承知せんわ。それにお話をきかせてくれる人がおらんようになる。そっちのおばあちゃんは十二の塔の話、できるか？」

「ほならあんたはおばあちゃんの一人もぼくにくれんのやね。」トーピーの心は音をたててしぼんでしまった。

「ぼくのおばあちゃんは父さんのお母さんでもあるねん。」イッファンが言った。

これはトーピーにもよく分った。

「そっちのおばあちゃんもうちと同じで年とっとるやろ？」

「うん。」

「なら心配いらんわ、おばあちゃん言うとったから、年寄りは死ぬもんだって。」

「うちのおばあちゃんは死なん。」

「死ぬわ、なんでやねん、うちのおばあちゃん嘘つかへんで。」
丁度この時下男が現われて、イッファンの祖母が亡くなったことを告げた。
イッファンは行ってしまい、トーピーはぽつんと残された。彼は顔をくしゃくしゃにしながら体育館に歩いて行った。年老いた小使いが向うの隅に腰をおろしてビーリーをふかしていた。トーピーは隅っこにしゃがんで泣き始めた。
夕方イッファンの家を訪れると、中はしめやかな雰囲気が漂っていた。家は人でひしめき合っていた。一日の来客を合わせたよりずっと沢山の人だった。しかしあのダーディーがいないのでトーピーには空っぽのように思えた。—その名前すら知らずにいたけれど。それにダーディーがいくら勧めてくれても、その手になる物は食べなかったけれど。通う心は、こんなことには縛られない。トーピーとダーディーの間には、ムスリム・リーグや会議派やジャナサングなんぞの連帯よりずっと強い結びつきができていたのだ、イッファンのダーダー（祖父）が存命していたとしても、二人の結び付きは全く不可解だったろう。ちょうどトーピーの家族の者たちにさっぱり分らなかったのと同じ様に。二人は離れては半端者だった。互いが相手を縛った。二人とも水を求めていた。互いが相手の渇きをいやした。二人はそれぞれの家にあってはよそ者だった。大勢人がいるのに一人ぼっちだった。二人は互いにその孤独を和らげあった。一人は72歳、一人は8歳であった。
「あのダーディーやのうてうちのダーディーが死んだらよかったんや…」
トーピーはイッファンをなぐさめた。
イッファンは返事をしなかった。どう答えていいか分らなかったのだ。二人は何も言わず、泣き出した。

5

1945年10月10日トーピーは心に決めた。お父さんが転勤の多い仕事についているような子とはもう友達にならん、と。
1945年10月10日、その日自体は何でもない日だが、トーピーの魂に刻まれた歴史の上では、この日はことのほか重要である。それは、まぎれもないこの日、イッファンの父親がムラーダーバードへ転勤になったからだ。イッファンのおばあさんが亡くなってからまだそう日も経たないうちにこの転勤となったので、トーピーの淋しさは一層つのった。新しい収税官タークル・ハリナームシンには三人の息子がいたが、トーピーはこの中の誰とも友達になれなかったから。ダッブーはまだ小さかったしビールーは大きすぎた。グッドウーはなるほど同年輩だったが、英語しか喋らなかった。その上彼ら三人には県長官の息子なんだというエリート意識があった。三人のうち誰もまともに、トーピーを相手にしなかった。
庭師と小使いはトーピーと顔見知りだった。それでトーピーは屋敷に出掛けて行った。その時ビールー、グッドゥー、ダッブーはクリケットをして遊んでいた。ダッブーの打ったたまがトーピーの顔へまともに飛んできた。ト

ーピーは驚いて両手を上げた。その両手の中にたまは飛び込んだ。

「How's that！（審判！）」

庭師のかしらが審判だった。彼は指を一本立てた。審判！の声がかかれば指を一本立てねばならないことしか、彼には分っていなかった。

「Who are you？」ダッブーがたずねた。

「バルバッダル・ナラーエン」トーピーは答えた。

「Who is your father？」グッドゥーが質問した。

「ブリグ・ナラーエン。」

「おい、」ビールーが庭師の審判に向って言った。「そのビルグー・ナラーエンいうて誰や？Any of our chaprasees？（うちで使っとる小使いの一人か？）」

「うんにゃ坊ちゃん町の有名なダグダルですだ。」

「You mean doctor？（お医者さんのことか？）」ダッグーがたずねた。

「Yes，sir」庭師のかしらはこれだけは英語が使えた。

「But he looks so clumsy.（それにしちゃ、まぬけづらじゃないか。」ビールーが言った。

「なんやと！」トーピーは腹を立てた。「言うてええことと悪いことがあるで。一発なぐったろか。」

「Oh，you son of a dirty pig！（ふん、薄汚ないチビが！）」こういってビールーがどんと突き飛ばした。トーピーは転んだが、やったなと言いながら起き上った。ところが庭師が止めに入り、ダッグーは飼っているアルセシアン犬をけしかけた。

お腹に七本も注射を打たれてトーピーは思い知った。以後決して収税官の屋敷には近寄らなかった。しかし、これから先、何をして一日を過ごそうかという問題がでてきた。家には年とった下女のシーターがいて、トーピーの心中を察してくれた。それでトーピーは彼女にまとわりついた。シータをたてに隠れるようになってからトーピーは気まで小さくなった。シーターは家のみんな、小さいのから大きいのまで、に叱られてばかりいた。それで二人は互いに好き合った。

「強情はるもんやないで、バーブー（ぼんや）。」ある晩、トーピーがムンニー・バーブーとバイラヴのことをうらやんで、ためにひどく叩かれたとき、シーターはトーピーを自分の部屋に連れて行ってお小言を始めた。

話というのはこういう次第である。冬のことであった。ムンニー・バーブーにコート用の新しい生地がきた。バイラヴにも新しいコートが仕立てられた。トーピーにはムンニー・バーブーのコートが与えられた。コートは新品同様だった。ムンニー・バーブーの趣味に合わなかったのである。とはいっても彼のためにといって仕立てられたものだ。つまりは、おふる　。トーピーは即、もう一人の下女ケートキーの息子にやってしまった。向こうは非常に喜んだ。下女の子供にやった物を取り戻すことはできない。それで、トーピ

ーは風邪でもくらうがいい、ということになった。
「風邪なんか食べんよ、ご飯食べるねん。」トーピーは云った。
「くつでも食らうがええわ。」スバッドラデーヴィーが言った。
「くつは食べるもんやのうて、はくもんやろ、そんなことも知らんの。」
「おばあちゃんに何ちゅう口のきき方するんや。」ムンニー・バーブーがむっとして言った。
「ほなありがたいこの人を拝ませてもらおうか。」
このあとの騒ぎときたら！祖母は怒髪天を衝くありさまだし、ラームドゥラーリーはお仕置を開始！というわけだった。…
「もう十年生になったんやさかい、おばあさんにあんなこと言うもんやありまへんで。あんたのおばあさんやないか。」シーターはこうさとした。
シーターは、十年生になったんやから、などとたやすく言うけれど、事はそう簡単にはいかなかった、十年生まであがるのに、トーピーは数々の辛酸を嘗めねばならなかったのだ。二年も落弟したのだ。４９年に九年生になったが、十年生にあがれたのは５２年のことだった。
トーピーが初めて落第したとき、ムンニー・バーブーはインターミディエト（大学予備課程）で、バイゥヴは六年生をそれぞれ一級でパスした。家中の者がこぞってトーピーを笑いものにした。トーピーは泣きに泣いた。トーピーはのろまだった訳ではない。充分頭はよかった。ただ、勉強しようにもできないのだ。勉強しようと机の前に坐ると、ムンニー・バーブーが用事を言いつける。或いはラームドゥラーリーが、下男に頼めない買い物を言いつける。一こういうことがなくても、気がつけばバイラヴが彼のノートで飛行機をつくって飛ばしてしまっている。
二年目は腸チフスにかかってしまった。
三年目、トーピーは第三クラスであがることができた。この、第三クラスということは、恥の汚点のように彼の頭からはなれなかった。
でもトーピーの苦労も分ってやらねばならない。
４９年には彼は友達、すなわち、同級生と一緒だった。彼は落第した。同級生は先へ進んだ。一人取り残された。５０年、同じ学年で、前は下級生だった八年生とともに席を並べねばならなかった。
あとから来た者たちと同じ教室に学ぶのはたやすいことではない、友達は十学年にいる。彼らにまじって、共に遊んだ。同じ学年になった者の中からは誰とも仲よくなれなかった。クラスにいると自分がそこに坐っていることが奇妙に思われた。そのうちトーピーを踏みつけにするような事が起った。先生が、出来のよくない生徒を注意するのに、トーピーを例にあげるのだ。
「どういうことやサーム・アヴタール（またはムハンマド・アリー）、バルバッドラみたいに落第したいんか。」
とクラス中がどっと笑う。笑うのはきまってもと八年生だった連中である。
彼はなんとか、この年を乗り切った。しかし、５１年、再度の落第が決まるとトーピーは魂がぬけてつちくれのようになった。もう十年生にも友達は

いなくなってしまった。八年生だった連中が今の十年生だ。七年生だった奴らと同じ学年になってしまった。彼らの中に混じっていると、トーピーは相当の年寄りに見えた。

彼は何不自由ない賑やかな自分の家の中と同様、学校においてもやはり一人ぼっちだった。先生はトーピーを全く無視した。問いが出されて、手を挙げたところで、どの先生も彼にあてようとしなかった。それでもなお手をあげ続けていると、ある日英文学の先生が言った。

「三年もこの本を読んどりゃ答は全部そらで言えるやろ。ほかのみんなは来年高校の試験を受けなあかんのや、そやからお前にはさ来年答えてもらうわ。」

トーピーは、黒い顔が赤くなる程恥入った。その上クラス全員高笑いしたので死にたい気持ちだった。彼とて初めて九年生になった時にはこの連中同様の子供だったのに。

その上、同じ日の休み時間、アブドゥルヴァヒードがひどい言葉を浴びせたのでトーピーは狂わんばかりだった。

ヴァヒードはクラスで一番出来がよく、級長でもあった。何より問題なのは、こいつが赤油のドクトル・シャルフッディーンの息子だということだ。

彼はこう言ったのだ、「よお、バルバッダル！何でまた俺らと一緒におるんや。八年生の連中と仲良うせえや、俺らは出ていくけどお前は連中んとこにのこるんやろが。」

この言葉はトーピーの胸をぐさりと刺した。こうなったらチフスに罹ろうが何に罹ろうが絶対試験に通ってやる、と心に決めた。

ところが学期半ばに選挙がやってきた。

青油のドクトル・ブリグ・ナーラーヤン氏が立候補したのは言うまでもない。選挙に出馬する人が家族の中にあるというのに、そんな中で一体誰が落ちついて勉強できよう！

青油氏の供託金が没収されて、家の中が少し静かになったとき、すでに試験は目前に迫っていた。

トーピーは必死に勉強した。ところで、こんな状態にあって勉強などできたものだろうか？そういう訳だから、トーピーが試験にパスしただけでも、大したものだった。

「こりゃまた！悪いことがなけりゃええがの。まずまずのスピードや、三年目に第三クラスでパスしおった。」と祖母が言った。

「しかしやな、シャルファーの息子は第一クラス（級）なんやからな。」ドクトルは言った。（父はシャルフッディーンのことをシャルファーとしか呼ばなかった。）

トーピーにはアブドゥルヴァヒードが不愉快だった。第一クラスになったのは彼の罪ではないし、トーピーが第三クラスに来たのも仕方のないことだった。それでも、ヴァヒードと自分がこんな風に比較されると悔しかった。

丁度その頃トーピーは、それまで知らなかった人達にも出会った。彼らは

早朝、男の子達を集めて棍棒の使い方を教えたり、レスリングをさせたり、行進させたり、話をしたりした。

トーピーは、ふとしたことで彼らに近づいた。歓迎された。しかし、そのうち、これがガンディーさんを殺した一派だと知ると恐ろしさに身が縮んだ。それでも彼はその人たちと会うのをやめなかった。

ムスリムが如何にしてインドを駄目にしたかを、この人達に聞いて始めて知った。国中の回教寺院は、奴らがヒンドゥー寺院を壊してつくったものだ。(トーピーはこれには疑いをもった。というのは、町にある二つの回教寺院は建て始めから知っているが、別にヒンドゥーの寺が壊されたりしなかったから。)牛殺しはムスリムお気に入りの趣味だ。また、ムスリムは国をバラバラにした。パンジャブとベンガルの何十万ものヒンドゥーの年寄り子供を惨殺し、女を凌辱した。奴らは何だってやった。ムスリムがこの国にいる限り、国の安寧もありえない。それ故、ムスリムをアラビア海にまで突き落すことは、ヒンドゥー青年たるものの義務である。

こういったすべての話は心をひきつけた。話を聞きながらも、幾度かイッファンのことが心に浮んだ。ところがヴァヒードが第一クラスに合格したのを見るとたしかに、ムスリムのいる間は、ヒンドゥーはおちおち枕を高くして眠れもしない。と思うのだった。

それで、正しいインド人、正しいヒンドゥーの一人としてトーピーもムスリムに憎悪を感じ始めた。

そして52年の7月、学校に行く頃にはジャナサングの党員になっていた。それだから、シーターが、彼がまだ10年生やと皮肉を言うと、彼はたまらず言い返した。

「うちのおばあちゃんはムスリムのことば話して、ムスリムになったんか思うわ。」

6

イッファンの人生行路はまた全然別であった。政治には関心がなかった。それでも家で話題になることは耳に入ってきた。それに、スポーツ欄にしか興味がないにしても、そこを見るためには新聞全部を手にとらざるを得なかった。

イッファンが耳にはさみ、新聞で目にしたことは、みな彼をぞっとさせずにはおかなかった。彼は文学好きだった。ヴァーミク・ジャゥンプリー，サーヒル・ルディマーナヴィー，アリー・サルダール・ジャフリーをはじめこういった詩人の詩、あるいは、クリシャンチャンダル，アッバース他の小説家の作品は、今度の独立にどうもはっきりしないものがあることを彼に告げた。

誰が解き放たれたというのか
誰の額から隷属のしるしの墨がとれたというのか。
これはもうパンジャブじゃない、消えかけた美しい夢

いまはもう、二つは水に三つは火となったパンジャーブ
ジャーマー寺院にはアラーの信者
チャーンドニー・チョークには暗黒の夜
希望は泥の壷のように溶けて流れてしまい
恋人たちは騒擾の中におきざりに
さぁヴァーリス・シャーを呼ぼう
どこの墓やら知らぬが返事をしておくれ
そして恋をうたった書の
次のページをひらいておくれ、

どうか恋をうたった書の次のページをひらいておくれ！だが恋物語のページは突風で散り散りになり、死体となって腐りつつあり、また悲鳴となって響いていた。急行ペシャワル号では死体の数を数えていた。一娼婦の手紙となってネルー首相やムハンマド・アリ・ジンナーを探していた…

「シク教徒の奴らはひどいことをしよった。赤ん坊まで刃にかけおった。十三歳の女の子を二十人のシクが犯しよった。かわいそうにその子は半ばにして死んでしもうた…」

父親の部屋から声が聞こえていた。イッファンはベランダに腰かけ、ハージャー・アフマド・アッバースの小説『サルダール・ジー』を読んでいた。

…ふと、「道を誤ったのだ。」という、他ならぬハージャー・サーハブの別の小説にあった文句が耳に響いた。

しかし、一体誰が道を誤ったのか？誰もこの問いに答えなかった。十四，五の未熟な魂はこういった問いの森の中をさ迷っていた。ダッカからペシャワルまで人命という穀物倉に火の手が上がっていた。刈りとられた穀物も燃えていたし、畑の穀物も燃えていた。大地から空まで、濃い苦渋の煙が立ち込めていた。吸った息を吐き出すだけの余地もなかった。

「父さん、このヒンドゥーいうんはすごく悪い人らなん？」ある日イッファンは父親にたずねた。「それにこのシクいうの、ごっつう残忍な奴らみたいやね。」

その時イッファンは知らなかった。東西パキスタンのヒンドゥーとシクの子供たちも、ムスリムについて父親に同じ質問をしているだろうということを。

イッファンの質問は単純そのものだった。だが父親は単純に答えることができなかった。新聞はこう言う。心はこういう。おまけに立ち込めた煙が喉を締めつけていた。それでもとにかく何か答えねばならなかった。

「そうやない。ヒンドゥーやからわるいとか、ムスリムやから悪い、いうやないんや。」と父親は言った。

「そやけど…」

「起こっとることはわしも知っとる。」父親は大変荒っぽい口調でイッファンの言葉を遮った。イッファンはとまどった。お父さんは微笑みを絶やしたことがなかったのに、これは一体何が起こったのだろう。どうしたという

んだろう。
「何も叱ることはあらへん、」母親が口を出した。「ね、イッファン、このヒンドゥーやら、シクやらいう人は柄がすごう悪いの。」
「なんで？」イッファンがきいた。母親はぐっとつまった。「それにアラーの神さまがなんでこんなひどい運命にしはったん？」
「罪の報いやわ。」母親は言った。
「その子供らがどんな悪いことをしたんやろうか。」
「もうええ、黙りなさい。」母親も短気をおこした。
その日はじめてイッファンにとって、アラーの神の威厳がすこしく減じた。大人が罪を犯して子供がその報いを受けるなんてことがあっていいのか？
この疑念は非常に恐ろしいものだった。この疑念はイッファンを突然、無力感におとしいれた。アラーの神はヒンドゥーとシクの方についてしまわれた。
その夜イッファンは夢をみた。アラーの神の白い鬚が血に染まっており、ヒンドゥーとシクの集会で演説をしている。…
「このムスリムの子はどこから入って来たんじゃ。」アラーの神はイッファンの方を指さした。「こやつも殺してしまえ。」
これを聞くなり群集はイッファンに向って突進した。イッファンは逃げた。別の方向から年老いたシクが一人、こちらに向っていた。イッファンは、もう駄目だと観念した。ところがそのシクの老人はすばやくイッファンをターバンの中に隠した。群集は二人を取り囲んだ。誰かが刀を振りかざした。シクの老人の首がふっとんだ。首は転がりながら一方に逃げ出した。群集はその首の後を追った。首は何かの集まりの中にころがりこんだ。一人の老人が古びた眼鏡をかけ、上半身裸で座り、何か言っていた。首はその老人の背後に隠れた。男が銃を射った。古眼鏡の男は死んでしまった。
首はまた逃げ出した。
どこかの本屋に火の手が上がっていた。ジャワーハルラール・ネルーは自分の本の炎で奇妙に見えていた。首が言った。
「わしゃアフマド・アッバースの本にでてくるシクじゃ。ほれ！預かりものをお返しします。」
ターバンがほどけた。イッファンは跳び上がって、パンディットさんのチョッキのポケットに飛び込んだ。
「おまえは誰だね？」とジャワーハルラールがたずねた。
「ぼくはイッファン。」
「いいや、おまえはインドだ。今日またお前に出くわした。もう一度お前について本を書くつもりだ。」
群集がまたやって来た。ヒンドゥーとシクは皆ジンナー帽をかぶっていた。トルコ帽の者もいた。シェールワーニー服の襟からナットヤシの枝をのぞかせている者もいた。
ジャワーハルラールは群集を見た。彼は顔を真っ赤にして怒っていた。イ

ッファンもろとも、燃え盛る書物の中に跳び込んだ。イッファンは悲鳴をあげた。

そこで目が覚めた。

崩れかけの壁のもとで育った子供の物語は随分奇妙なものだ。

目が覚めるとイッファンは自分の殻にとじ込もった。

いつものように起き上がった。いつものように顔と手を洗い、両親に朝の挨拶をした。全くいつものように、生かされていることを祝福してもらった。全くいつものように学校に出掛けた。しかし、イッファンには学校の人たちがいつもと違って見え始めた。バーブー・トリヴェーニー・ナーラーヤンは、イッファンをきつく殴り、ラクシュマンをやんわり殴ったように思えた。どちらも同じことをしたのに。チャウダリー先生は、イッファンに比べるとラームダースの質問に丁寧に答えたように思えた。

学校の友人が皆、イッファンには見知らぬ人のように見え始めた。イッファンは自分が全く一人ぼっちだと感じた。シェールワーニー服が肩にずっしり感じられ始めた。一生涯シェールワーニー服だけを着ようと、その日秘かに誓いをたてた。

体育の時間はフットボールだった。イッファンは名選手だった。相手側のストッパーが足を蹴った。イッファンは転倒した。よくある事だった。しかしこのときイッファンは猛烈に腹が立った。すぐさま仕返しをした。そいつも倒れた。先生はイッファンをどやしつけた。イッファンは退場を命ぜられた。他のみんなは競技を楽しんでいる。イッファン一人だけが外に立っていた。そして、もし自分がムスリムでなかったなら、先生はこんな風に追い出しはしなかったろうと考えていた。

夕方戻ってきたイッファンが妙に元気のない様子をしているのに、母親は気づいた。それで何かといたわった。デリーの叔父さんの手土産のハブシー・ハルワー（人参の甘煮）も食べさせてもらった。それでもイッファンの表情は明るくならなかった。

「どうしたんや、ぼん。」デリーの叔父さんがたずねた。

「どうもせん。」

「さては学校で叱られたんやな。」叔父は呵々と笑った。

「パキスタンはムスリムがつくってもらったん、そうやろ？」イッファンはたずねた。

「ちがう。イギリス人がつくらせたんや。」叔父が答えた。

「そんなこというんは叔父さん一人や。ぼくが言いたいのはね、ムスリムがパキスタンをつくってもらったんやったら、なんでぼくらここにいるのかいうことや。父さん、なんでパキスタンに行かへんの？」

「そんな下らんことに頭を使うて、時間の無駄やぞ。」父が言った。

「ヒンドゥーの先生はぼくらに教えてくれへん。それに、ヒンドゥーの生徒はぼくらをいじめるんや。おとついなんか、一寸バヴァーニーのお菓子に手がさわっただけで、それを捨ててこういうねん。『お前なぁ、ここはパ

キスタンやないでえ！』て」

「おじいさんのところに行ったとき、ゴーリーシャンカルさんは、おまえを可愛がってくれんかったか？」叔父さんがきいた。

「くれた。」

「というて、あの人ヒンドゥーやないのんか？」

「けどおじさん、ここにはああいうヒンドゥーの人はおらんで。」

「お前のおじい[illegible]ンドゥーの触れたものは口にせんが、ゴーリーシャンカルさんとは仲良[illegible]。そうやないか？」

「うん、でも…」

「たまたま友達のバ[illegible]ニーがお前の触ったもんを食べんかったからいうて、何でかたきみたいに思うんや？」

「パキスタンのことなんか言うたから。」

「誰かが、『カラスがお前の耳とって逃げたぞ！』いうたらどうする？耳たしかめるか？カラスの後を追うか。何でもかでも真にうけたらあかん。パキスタンをつくったんはお前さんか？」

「ちがう。」

「ほな、何怒っとるんや？」

納得はしたものの、正体不明の不安はなくならなかった。学校には通い続けたが、ヒンドゥーの友達からは段々と遠ざかるようになった。シャンカル、ラームディーン、プラブー、バワーニー、シーターラーム…そんな連中は誰も近寄らぬようになった。今彼の回りにいるのは、ヴァージド，ムヒッブル。ハサン，サルワル…といった種類の名ばかりだった。以前の友達では、ムザービルとジャマール以外はもういなかった。

この変化には誰一人気付かなかった。教師はただ教え続け、生徒はただ学び続けた。いま生徒同志の友情を支えているものは何か―それを知る必要のあることすら、教師には分っていなかった。

以前の友だちと離れ、友だちでなかった者と親しくなったのも、何故そうなったのか生徒自身も考えては見なかった。

むろん、ウルドゥー語の先生は、自分のクラスの人数が減ったことに気づかざるを得なかった。もう、ウルドゥー語を習おうというヒンドゥーの生徒はいなくなった。

ある日先生は奥さんに言った、

「この調子でいくと、ウルドゥー語のクラスはなくなってしまうわな。」

「なら思い切ってパキスタンに移ってしまおうやありまへんか。」

「二年後には退官や。ずっとここに生きてきたんや、なんで今さらそんな所に死にに行かんならん。」

「なんかいうたら、生きるや死ぬやいうこと.をもちだして…」奥さんは不機嫌になった。「娘を二人も抱えとるのよ、漬物にでもつけるつもりでおいでかね！」

「カリームッラーさんに手紙は書いたんや。カラチにゃムスリムの男があ

ふれとるらしいんやが…。」

年頃の娘二人の結婚に手を焼いている先生に、ガーリブの恋愛詩がうまく講義できたものやら。

教室で出席をとり始めると先生の気は重くなる一方だった。ムハンマド・ハニーフ，アカルムッラー，バドルル・ハサン，ナジャフ・アッバース，バカーウッラー，ムハンマド・ウマル・シッディーキー，ヒザブル・アリー・カーン・トーキー…同種の名前を呼び続けていると先生はうんざりした。どこにいってしまったのやら、アーシャーラームだとか、ナルバダープラサード，マーターディーン，ゴーリーシャンカル・シンハー，マードーラール・アグラワール，マシーフ・ピーター，ロウナクラールといった名前は…。

更に先生ががっかりしたのは、ヒンディー担当のパンディット先生の出席薄があふれんばかりになっていることを知った時だった。色々な種類の名前は彼の出席薄を見捨ててパンディット先生の出席薄に所を変えたのだ。

自分の宝を奪ったパンディット先生を、彼は嫉妬し始めた。そしてヒンディー語の悪口を言うようになった。

「くわばらくわばら、なんてまあけったくそのわるい言葉やろか、二ことでもしゃべろうもんなら舌がもつれてまうわい。」

こうしたことは、パンディット先生の耳に入ったので、それは気を悪くした。彼はウルドゥー語やペルシャ語に造詣が深かった。しかしウルドゥー語の先生に対抗して、彼もウルドゥー語を話すのをやめた。全くのヒンディー語を話すのは苦手だった。しかしめげずに頑張った。ややもするとウルドゥー語やペルシャ語の単語が口をついて出ようとするのだったが、苦労してそれらを記憶の外へ押しやった。

二人の緊張関係はついに、ウルドゥーの先生が学校の例年の行事であるムシャーヤラー（詩会）の世話役にパンディット先生の名を載せないという所にまで発展した。詩会がひらかれた。が生徒たちが大騒ぎした。一方パンディット先生はお返しにヒンディー語の詩会（カヴィ・サンメーラン）を開いた。町はじめてのヒンディー詩会だった。ヒンドゥーの金貸し組合は喜んで資金を提供してくれた。盛大なヒンディー詩会となった。しかし閉会後、パンディット先生は友人のアフマドゥッラー弁護士にこう言った。「ムシャーヤラーのような雰囲気にならなんだなぁ。」と。

アフマドッラーは今は地区の会議派の議長で、もと地区ムスリム・リーグの議長だった人だが、こう言った。

「パンディットさん、伝統は一日にして成らず、ですわ。じきにみんなムシャーヤラーのことなんて忘れるよってに。」

パンディット先生にはこの言葉は不愉快だったが、何も言わなかった。一方アフマドゥッラー氏は家に向いながら、下の息子のクルバーンアリーと娘のアーエシュバーノーにはヒンディー語を習わせようと考えた。ウルドゥー語はおさきまっ暗だと見たからである。

丁度その夜イッファンは母に詩を読んで聞かせた。ヒンディー詩会で激賞

されたものだった。すると母は薄笑いを浮かべて言った、
「つまらんねえ。うちの田舎の便所掃除の女だってそれより上等の言葉を使っているよ。」
「これからはその言葉が使われるのさ」父が言った。父は県の長官だったので今日の詩会に出席した。顔を出さなければ、町の者は、ムスリムだから来なかったのだと陰口を叩いただろう。
「なんで？父さん。」
「もっと大きくなりゃ分る。」
「ヒンドゥーの言葉やからとちがうん？」
「なんでいつもいつもヒンドゥーやのムスリムやのいう事ばっかり言うんだ。」また、父は叱りつけた。
ここ数年、怒りっぽくなった父をイッファンは見てきた。だが何故そうなったのか、イッファンには分らなかった。
それでも現実はそう成ってしまっていた。

7

しょっちゅうイッファンの話を持ち出すが、だからといってこれをトーピーとイッファン両人の物語とは思わないで載きたい。そうではない。これはあくまでもトーピーの物語なのだ。それでも尚かつ、幾度もイッファンの胸中は覗き込まねばならない。今インドの国に起こりつつある変化はトーピーという窓からだけでは見極められないからだ。イッファンとは言え、まさにトーピーのとったもう一つの姿に他ならない。この、トーピーには数えればきりがないほど多くの姿がある。ベンガル州，パンジャブ州，UP州，アーンドラ州，アッサム州…全国どこにでもこのトーピーが自分の問題の解決策を乞うて鉢をかかえ、イデオロギー、哲学、あるいは政治の門を叩いている。しかし、どれも力にはならない。
私はここに全てのトーピーを描くわけにはいかない，そんなことをすればこの小説は際限もなく拡がってしまうだろう。それ故、私はただ二つだけを選んだのだ。
これらトーピーは互いに反発もするが、どちらかが欠ければ不完全でしかありえない。トーピーの一トーピーたちのといってもいいが一立ち向かう問題は親から譲り受けたものだ。伝統、愛憎、信義、疑念と恐れ…
カビールからゴールワルカル、フスローからアユーブ・カーンまで。フスローやカビール以前にもあったし、ゴールワルカルやアユーブ・カーンののちにもあるだろうが、トーピーはこの死をもたらす渦の中にいる。
トーピーはいつの時代にも、この命まで奪う渦のただなかに生れてくる。彼はいつの世にも、崩れつつある壁のもとに生れ、体についた埃を払うのに随分と日がかかる。そしてこの間彼は孤立無援である。彼の言わんとするところを誰も分ってくれない。その上、今私達の追っているトーピーは他のどの時代のトーピーよりも深刻な問題である。今日彼をどういって褒めてやる

こともできない。

いまはどのトーピーも、ジャナサング、ムスリム・リーグ、コングレス、共産党その他何かに属している。今日彼の主張はさまざまであり、その上それぞれが新しい言葉でものを言っている。考え方も違っている。それだから、私達は何度もイッファンとご対面しなくてはならないのだ。

イッファンは青年に達したとき、何の夢ももっていなかった。彼は勉強を続けていた。遅滞なく進級していたが、何をなすべきかが分っていなかった。上級公務員試験や外交官試験の合格者にはここ数年ムスリムの名前は一つとして見当たらなかった。ヒンドゥーの名もそれほど多くはないとは、イッファンは考えなかった。彼はこんな試験は受けようともしなかった。幾日も眠れぬ夜を過ごした後にも夢が見れなかったとき、イッファンは鬢をたくわえた。アッラーを信仰しても心は晴れなかったが、彼は脅かされる種族の代表であったからアッラーの神に祈りを捧げるようになった。

父が逝った後、彼は幼い弟や妹の面倒を見なければならなくなった。姉は夫君と共にパキスタンへ移ったあとだった。度々イッファンは来るように呼ばれたが、パキスタンへは行かなかった。彼は恐れていたのだ。しかし、その恐れに打ち克ちたかった。

イッファンはあるカレッジで歴史の教鞭を執ることになった。彼はとても喜んだ。はじめは授業の念入りな準備をした。しかし教室に入って彼の見たものは、虚ろな目の生徒たちが死人のように座っている様だった。誰の眼からも、何の感情も読みとれなかった。目は、あっちでしまりこっちで開き、していた。心の主はあわてて飛び出し、窓を閉め忘れたようだった。窓は風を受けて開いては閉じ、閉じてはまた開くのだった。ガラスは次から次と割れていた。戸は雨にうたれ、朽ちつつあった。

イッファンは教室を見渡してぞっとした。

この学生らに何を教えたらいいのか？二本の河が合流すれば、三本ではなくて一本になるんだ　と、どうやって分らせたらいいのか？歴史というものは、コマ切れの年代区分や瞬時をいうのでなくして、いわば時間の手になる自叙伝なんだと、どういって教えてやったらいいのだ。パーニーパットの戦い、バクサルの戦い、あるいはプラッシーの戦いは、この歴史という河の流れに浮かぶアブクなんだ…

ムスリム・ラージプート・ディグリー・カレッジという校名だ！

教室にラージプート族のムスリムしかいないという訳ではなかった。シェークやサイヤド、あるいはパターンの顔ぶれがあり、カレッジ全体としてみればヒンドゥー，ラージプート，カヤスタ，ブーミハール，タークル，アヒール，クルミーと、何でもそろっていた。ところが歴史の授業にはヒンドゥーの学生は一人しかいなかった。

ある日、アウラングゼーブ帝とシヴァジー率いるマラータ族のことが話題にのぼった。イッファンの考えでは、チョウハーンやシヴァジーといった連中は反動主義者なのであった。双方ともにヒンドゥスターン・ナショナリズ

ムの行く手を阻んでいたというのである。

例の唯一のヒンドゥー学生、チャンドラバリーシンが立ち上がった。そしてグル・ゴールワルカルやK・M・ムンシー版の歴史書の要点を口早にまくしたてた。

「先生！ムガルの皇帝どもはインドの古代文明を破壊したんです。イスラムの帝国ののさばっとった時代はインド文明の暗黒時代だったわけです。古代のヒンドゥー寺院ほど壮麗なイスラム寺院を、奴ら、一つだって建てられましたか？こんなコンプレックスがあったんで、それでアウラングゼーブはヒンドゥー寺院を毀させたんとちがいますか。」

イッファンはあっけにとられその学生の顔をまじまじと見つめていた。しかし、歴史の教師として、何か言わぬわけにはいかなかった。

「そんな言い方するんなら、こんことが言えるか？不可触民の耳に煮えたぎる鉛を注ぎ込んでおったのは、生まれのええヒンドゥーにコンプレックスがあったからや、なんぞと…。」

こういったやりとりで授業はまるまるつぶれた。チャンドラバリーはイッファンの言い分を認めないし、イッファンもまたチャンドラバリーの言うことを認めなかった。その日の夕暮れ、イッファンは暗い面持ちで家へもどった。

「どないしたん？」奥さんのサキーナーが尋ねた。

イッファンはことの次第を話した。「…だがね、もし学生らの頭にこんな事しか詰まってないとしたら、この国はこの先どうなるんだ？新時代の人間は僕らの世代よりずっと足らん所が多い。僕らに夢はあらへん、そやけど奴らとくると偽りの夢を抱いとるんや、僕は歴史なんか教えとるけど、ヒンドゥスターンは歴史のない運命にあるように思えてならんのや。僕は僕で、イギリス人の書いた歴史を習った。チャンドラバリーはチャンドラバリーで、ヒンドゥーの書いた歴史をおそわった。パキスタンにしても同じことやろう。たぶん歴史の日付にゃイスラム印が押されているやろ。ほんまのヒンドゥスターンの歴史の書かれるんはいつになるやろ。」

「だからパキスタンに行ってしまおうて言うてるやん。」サキーナーが言った。

「ムスリムの来る以前ヒンドゥスターン人は首狩り族やった、とでも教えるためにか？」イッファンは首を横に振った。「行かれへん。こっちも向こうも、無駄なことばかりしよるんや。もう、教師はやめや。」

教師を続けるのに、もう一つ別の難儀もあった。学生が、英語も、彼の言葉も解さないのだ。それでも説明をしていると、自分の声が、学生の無関心な表情にあたってもどってくるのを感じるのだった。

それでも彼はなんとか一年、勤めあげはした。だが丁度その年、理事会秘書の息子が歴史で、修士号をとった。当然働き口が要る。―― すると町のヒンディー語新聞に、イッファンはムスリム・リーグの党員であるとか、アウラングゼーグは誉めるのにシヴァジーはけなす、との記事が載るようになっ

た。

理事会はイッファンを問い正した。その頃ムスリム大学に欠員ができた。イッファンは丁度そこのO・B・であったので採用が決まった。

そしてこんな風に、1960年彼はトーピーと再会するのである。

8

トーピーがアリーガル・ムスリム大学とはどういうことなのだ。!? 恐らく読者の多くはこれを聞いて驚かれたことだろう。それというのもトーピーはジャナサングに、入ったとばかり思っていたのだから。とすると彼はムスリム・コミュナリズムの牙城であるアリーガルに、何をしにやってきたのだ？

私が単に作りごとを話しているのなら、こんな問いは避けて通るだろう。しかし私は皆さんに一つの伝記を語っているのである。実は、トーピーは、ただムスリムの若者がどんな夢を持っているかを知りたいために、アリーガルまでやって来たのだ。

ご注意いただきたいことは、以前は夢がわずかに三様、つまり子供と若者と老人の夢しかなかったことである。しかし、それから、インド独立の夢がリストに加わった。次いで人々の夢には大きな混乱が起こった。両親の夢が子供の夢と衝突し始めた。父親は息子を医者にしたがるわ、息子は共産党専任になるわ、それのみならず、雨後の竹の子よろしくにょきにょき夢が顔をを出してきた。官吏の夢、労働者の夢、工場主の夢、映画スターになる夢、ヒンディーの夢、ウルドゥーの夢、インド人の夢、パキスタン人の夢、ヒンドゥーの夢、ムスリムの夢、国中が夢という泥招にはまってしまった。子供らしい夢や、著者の或いは老人の夢は、夢の押し合いへし合いでずたずたになってしまった。ヒンドゥーの子供、老人、若者のもつ夢は、ムスリムの子供・老人・若者のもつ夢から離れていった。夢はベンガル人の夢だとか、パンジャブ人の夢、ウッタル・プラデーシュ人の夢となった。

政治に携わる者たちは、只、ある日ヒンドゥスターンから一部が離れ、パキスタンと名が付いたことしか見なかった。これだけのことなら何も慌てるには及ばない。だが夢は絡み合い、文学者の手足は切られた。夢を見ることは個人の、国の、そして齢のなす仕事である。しかし我が国にあっては、一介の人間としては個人は夢を見ない。あまり覚醒しすぎて国の目は痛がっている。残ったのは齢だ。しかしそれは夢みることを忘れてしまった。

それじゃ一体誰が何を支えとして夢を見るのだ？

しかし恐ろしいことに、誰も夢が危ないことに気付かなかった。それは、誰もが、みんな何かしら夢を見ているものだと思い込んでいるからだ。

こんな訳でトーピーも夢を見ていた。奨学生の募集があった。トーピーも応募した。しかしその奨学金はムスリムの学生に与えられた。そのムスリムの学生は特にできる方でもなかった。奨学生選考者の中に縁故がいた訳でもなかった。しかし彼の父親の友人（ジャナサングの党員だった）は選考委員会の長であった。政治は政治、友情は友情である。奨学金はその学生のもの

になった。７２２人のヒンドゥーの学生を押しのけて、ムスリムの学生に奨学金が与えられたと知ると、トーピーはかっとなった。そこで彼はアリーガル大学で何らかの奨学金を得る夢を見始めた。

また、トーピーはパキスタンができたというのに、ムスリム大学がなくてはならぬ訳があるのかと、心の中で問答を繰り返していた。

そしてもう一つ、ヒンドゥ　スターンのムスリム青年はどんなものの考え方をするのか、どんな色彩の夢を見ているのか、知りたくも思っていた。

しかしアリーガルに来ると彼の目論見を全ておじゃんにしてしまう様な連中につかまってしまった。サルダール・ジョーゲンドラシン，ハーミド・リズウィー，イクティダール・アーラム，K・P・シン，…ヒンドゥー，ムスリム，シクの学生達の小さな集まりが、大学でもう一つの闘争をしていた。大学予科の者達であった。

ムンニー・バーブーからは、でかける時に大学ではムスリムより共産主義者の方がこわい、と教え込まれていた。しかしトーピーは彼らの手から逃れられなかった。

自分と同じほど、反パキスタンのイクティダール・アーラムに黙れ、などとどうして言えたろう。また、次のような訳でムスリム学生らに殴られたハーミド・リズウィーに、あっちに行けなどとどうして言えたろう。彼は、ウルドゥー詩会があるならヒンディーの詩会もあって然るべきだ、学生自治会はイスラムについての講演だけでなく、あらゆる宗教についても講演会を主催すべきだ、モハメッド生誕記念祭があるならクリシュナ生誕祭も行うべきだ、等と申し立てたのだった。

自治会の選挙にヒンドゥー学生を立ててその選挙運動をやる。殴られては選挙に敗れる、それでも一向にへこたれないのが誰あろう彼らだった。

「何がこわいわけ？」ある日ハーミドがきいた。「おまえは数の上では多い方に属しとる。四千万人のムスリムが、三億人のヒンドゥーに対して何ができるんや。」

「ヒンドゥー寺院を壊して回教寺院を建てた時にゃムスリムは四千万どころかもっと少なかったわ。」

「ほな聞くけどそんな時ヒンドゥーはなんで抵抗せなんだんや。」ジョーゲンドラが言った。

「ええか、シュクラー，」K・Pが言った。

「そういうことやないねん。昔の貸借勘定いい始めたらキリがないわ。ここには今四千万人のムスリムがおる。そんで、これからもここに住む、それだけや。」

「なんでここに住むんや。」

「なんで、やと？わしら、ここのもんやないか！」イクティダールは憤然となった。彼は怒ると、白いのがまっ赤になるのだった。「ヒンドゥー排他主義いうんや、それを。なんで住むんや、ときた。この国は貴様の父っつぁんのもんやとでも言いたげやないか。」

「そりゃ、」トーピーは言い返した。「俺の親父のやないが、あんたの親父さんのでもないやろ、何処の馬の骨やら分ったもんか、主人面して住みついてはおるけど。」

「よう言うた。ついでに貴様の父っつぁんもお祖父っつぁんも、ベルの木みたいにここに生えてきたわけや。」

「おいおい、イクティダール！」ジョーゲンドラがいった。

「言わせてくれ」イクティダールは彼の手を振りきった。「こいつらヒンドゥーの頭はいかれてもとるんや。歴史を勉強せえ、歴史を。ここにはな、どいつもこいつも外から入らなんだものはおらんのや。」

話が甚だけんのんになってきた。トーピーは立ち上ったが、イクティダールは坐ったまま立ち上ろうとしない。トーピーの勘忍袋の緒がきれようとしたとき、彼はケラケラ笑い出した。

「さあ、お茶を飲ませてんか。ほんで、コングレスの奴らに、父っつぁんの青油の薬ビンを二本進呈したってくれや、あいつらの政治の血管も筋肉もなよなよになっとるからな。」

「なあ、話違うけど、お前んとこに来た、鬚をはやした御仁は誰や？」ハーミドがジョーゲンドラに尋ねた。

「やっぱり3年生やな、知らんのか？」ジョーゲンドラが笑った。「ありゃ例のザルガームさんや、ブルブリャーの頃にいたとかいう。それにしても仲々の雄弁家やね。サイド・アンダーの話じゃスルタンニャージーや、ムーニスさんより上手いいうことやないか。」

「ほらほら、」K・Pが云った。「バルダーン・ニャージーとか、ムーニスさんと、この手合いが比べられるか？」

「M．A。じゃ首席の人やで。」ジョーゲンドラが云った。「ドクター・ターラーチャンドなんかあの人の論文をほめちぎったくらいや。」

「けど、M。A。で首席になって、ひげをたくわえるなんて、気がしれんなあ。」イクティダールは言った。

「その、ジャルガームさんてどこの人や。？」とトーピーが尋ねた。

「ジャルガームやない、ザルガームや。」K・Pが言った。

そうれ、とばかりにジョー，イクティダール，ハーミドが一斉にはやしたてた。「ガ」の発音を誤ったので罰金を払う羽目になり、K・Pはウルドゥーやアラビア語の単語をののしりながら、皆を、カフェ・ド・プーンスまで連れて行った。

わきのテーブルの学生らは誰かある女学生の噂話をしていた。また、隣りのテーブルでは、先輩のムッラーがテーブルを囲んだ学生らに茶をふるまい、コミュニストの操行についての話をきかせていた。

「…この大学じゃ、ヒンドゥーのことは心配いらんが、コミュニスト を警戒せんならん。ザーキル・フサイン博士は昔の仇を討っとるわけや。コミュニストが入りこんでない学科はないというてもええくらいでな。あろうことかムスリム大学の女生徒が舞踊をしたり、文化を知りましょうとかいってアン

トニーとクレオパトラを演じたりしよる。」

K・Pが口出しして、「そりゃほんまにおかしいわ。ムスリムの女の子はライラーとマジュヌーン，シーリーンとファルハードの芝居をせんとあかんね。」

あちこちのテーブルから笑いがおこった。笑ったのは大抵ムスリムの学生だった。

「青油の新参者くんをわるい道にさそわんでもええやろうに。」との先輩ムッラー氏の言葉にK・Pが言い返そうとした丁度その時イッファンがもう一人の講師と共に入ってきた。

「ちわー。」K・Pが挨拶した。

イッファンは挨拶を返し、「やられとったのは誰や？」とたずねた。

「K・Pですよ先生。」ジョーが言った。「こっちへどうぞ。」

講師二人はその場に加わった。イッファンはK・Pに話しかけた。

「君の芝居は見事やったそうやね。僕はあいにくデリーに出掛けておったもんで、残念なことをした。ところでこちらはどなたさんかな？」イッファンはトーピーの方を指してたずねた。

「名のったらどうや？」カーンが言った。「こいつの名前は一寸公用語風なもんで、先生。」

イッファンは苦笑したが「バルバッドラ・ナーラーヤナ・シュクラー」というのを聞いて吃驚した。

「どこから来られた？」

「ベナレスから。」

「とすると、ドクトル・ビグナーナラーヤン氏の息子さんやないか？」

「そうです。」

「お前のお祖母さんはウルドゥーを習わせに、ここまで来させたんか？」

「イッファン！」トーピーは目を丸くした。「いつからや、その髭！」

「こいつは僕の幼な馴染みや。」イッファンはK・Pらに告げた。「こいつに弟ができそうな時な、下女に弟がええか妹がええか聞かれて、何というたと思う？　自転車がええわや。」

これを聞いて、「カフェ・ド・プーンス」の屋根が揺らぐほどの爆笑がおこった。テーブルの上で砂糖粒をついばんでいた雀も驚いて飛び去った程であった。

「こりゃまた！わしらこいつがそんなにすごい奴とは思うてなかったわ。」とイクティダールがいった。

「それやからこそヒンディーで修士をしにわざわざベナレスを離れてアリーガルにおでましになったんやないか！」K・Pがからかった。

「とするとムスリムの触ったもんでも食うようになったんか？あのごっついチュティヤー（ヒンドゥーが頭頂部に刈らずに残す長い髪の毛）はどないした」イッファンがこう尋ねると、トーピーはムッとして、「お前のあごひげの役にでもたったんやろ。」と言った。誰も笑わなかった。イッファンは

にっこりした。
「もう食べたんやったら一緒に来いへんか？」こういってイッファンは立上った。
「先生、もうお茶がくるのに。」K・Pが言った。
「イクティダールが飲むわ。」
「お勘定もあるのやけど。」またK・Pが言った。
「心配せんでええ。」
イッファンは代金を払うとトーピーを連れてそこを出た。
二人とも嬉しくてたまらなかった。が、どちらもそれを押し隠していた。二人は思い出を総ざらいしてみた。しかしどちらにも、とくに話すべきことがなかった。
というのも彼ら二人はインド独立以前に別れてしまっていたからだ。
「お祖母さんは、ヒンディー語が公用語になったんで、随分と怒ってはるやろ。」
「もう死んでしもた。」
「え？」
「驚くことあらへん。そういつまでも生きとられへんわ。」
「ほんでもお前のお祖母さんやろ。」
「俺の心のお祖母ちゃんは、俺らがパンチャムの店でバナナを買うとったあの日に、死んでしもたんや。お祖母ちゃんを取り換えとったんやから。ほんで、お父さんはお元気？」
「父は亡くなったよ。」
「姉さんは？」——トーピーは驚いた風を見せずに、こう別の質問をした。
「パキスタンへ行ってもうた。」
トーピーはこれにも驚くことなく、さらに尋ねた、「弟さんは？」
「ここにおる。妹もや。」
話柄が尽きてしまい、二人は黙った。暗い気持ちになった。二人の間には目に見えぬ壁があった。心臓の鼓動は一方から他方へ伝わらないでいた。
「パキスタンしか手はなかったんやろか。」トーピーがまずその壁に鶴嘴を打ち込んだ。
「さあ、」とイッファンが言った。
「もう今はパキスタンの悪口もいえんなあ。」
「なんで。」
「だってな、おまえの姉さんが行っとるんやから。旦那さんは何をしとるん？」
「パキスタンの空軍中尉や。父が倒れても、こっちに来る許可さえもらえなんだ。姉もむろん来れんかった。」
「お前はなんで行かんかったんや？」
「自分がヒンドゥーなんかこわがっとらへんいうことに自信をもちとうてそれで行かなんだんや。」

「ヒンドゥーがお前に何か悪いことしたか？お前の義兄さんを来させんかったのはヒンドゥーや言うんか？」

「そうやない。」

「ほな（フィル）、なんや。」

「フィルとちがう、ピルや。」歯をきりきりいわせてイッファンがこう言うと、トーピーは喜んで笑った。いくつかの壁は崩れた。二三の恐れも消えた。よそよそしさもいくぶん遠のいた。

「言語改良計画はいまだ続いとるとみえる。それにしても、なあ、あの頃ときたら…。」トーピーが言った。

「うん。」

二人は沈んだ気持ちになった。イッファンはヒンドゥーをおそれ、それ故にヒンドゥーを憎んでいた。トーピーはインドの古代文化が好きになっていたから、ムスリムを憎んでいた。しかし二人の心は晴れなかった。憎悪の壁にのぼって古い友情が互いに覗き見を始めると、二人の心は重くなった。瞬く間に過ぎてしまった日々が再び心をよぎった。あらゆる会話、思い出、スローガン…二人は幾年にもわたる旅を回想してみて、自分ら二人とも損したのだと知り、暗い気持ちになった。偽善の荒野にいる二つの人影は、それぞれに孤独な自分の姿を見出すと互いに抱き合った。

「どうもお前の大学とはうまが合わんようや。」

「ほな今度は僕の女房と気が合うかどうかやな。」

イッファンの家の応接間は簡素そのものだった。どの壁も煉瓦がむき出しのままだった。飾り物の暖炉の上にシヴァ神の胸像が置いてあり、その横にはメッキをした額縁に二枚の写真があった。一枚はイッファンの祖母ので、もう一枚は父親の写真だった。

「シヴァ神はぬけとる思うて飾っとるんか？」

「ゴーマティー川はガンジス河に流れ込むやないか。」イッファンは微笑して言った。「僕はヒンドゥーは嫌いやけど、シヴァ神のことは好きや。なんでて、人間らしいやろ。ぬけとる。海を攪拌するのにまじっとったからいうて、何で一人で毒飲んだんや？不老不死の霊水を飲んだ奴らに一寸ずつなめさせてもよかったのに。でも毒は一人で飲まなならんもんや。それが人間と神さまの違いかも知れん。毒を飲み下すのはシヴァ神、毒杯を仰ぐのも一人ソクラテス、十字架にかかるのはキリスト一人、そういうもんや。俗世を棄てて、一人王子が出る。試練のときにゃ大衆は耐えられん。何とかカルバラーには七十数人が集まったけどな。人間がいつもこんなに孤独なんは何んでなんやろうか。バルバッドラ？」

「もう食べる時間やからやわ。」サキーナーが部屋に来て言った。

「これが家内のサキーナーや。」

「そうやろ思たわ。」

「こいつの発音をわろたらあかんよ、ウルドゥーをつかう家なんやこいつんとこは。で、そのお祖母さんに意地を張り通したもんでこいつはちと田舎

っぽうなったんや。」イッファンが言った。
「奥さん、そうやないんです。」
「ほなどういうわけ？」サキーナが言った。彼女の目がいたずらっぽく輝いた。
「こいつはな、僕の幼友達のバルバッドラ・ナーラーヤナ・シュクラーいうねん。」
「おたくもうちょっと簡単な名前にはできまへんの？」とサキーナーがきいた。
「こいつはもう代々の、極め付きヒンドゥーなんや。ムスリムの触ったもんは食いよらん。いや。もう今は食べるんか？」こう、イッファンはトーピーに尋ねた。
「そりゃよかったわ。田舎っぺの口に合いそうなもんはいまこれっぽっちもあらへんからね。」
この言葉はトーピーの気にさわった。そこでサキーナーに意地を張って、彼は食事をする決心をした。
その日、トーピーは生れて初めて、ムスリムの家庭で食事をとった。アリーガルに来て以来、ターリー（食物を盛る）盆を使って食事をする習慣はなくなっていた。それでも、イッファンと同じ器から具をとり分けるのは異様な感じがした。サキーナーと同じさじでダールをすくうのには抵抗があった。幾度か手が震え、テーブル・クロスにダールや具がこぼれた。しかし彼はひるまなかった。ダールの味も一味違っていた。ニンニクで味付けされたアルハル豆のダールを啜ったのは初めてだった。というのは、トーピーの家庭では、ニンニクや玉葱など、目にすることもなかったからである。彼の家ではうすいダールに、生のギーを入れるのだった。その味もこたえられなかったが、サキーナーの味つけしたダールも中々のものだった。
「これからは食事はご勘弁願うわ。」食事を済ませた後、トーピーが言った。
「なんでやの？」サキーナーが美しい眉にしわをよせた。
「困ったな、おい、ちょっとなんとか言うてくれや。俺が根っからのヒンドゥーやいうことを。」トーピーがイッファンに言った。
「私かて、根っからのムスリムです。おたくの帰りはったあとはこの食器をごしごし洗うわ。」サキーナーが言った。
「ほな俺が食べんかったら洗わんわけ？ほれ見、これがムスリムの不潔なとこや。」
サキーナーは歯ぎしりしたままで言い返せなかった。
こうしてトーピーは食卓でサキーナーと初めて顔を合わせ、初対面というのに二人は早速いさかいを起こした。

9

まだ、サキーナーのことでは、イッファンの妻であるとしかお伝えしてい

ない。しかし、彼女は生まれながらにしてイッファンの妻だった訳ではない。

サキーナーは、裕福なムスリム家庭の一人娘だった。三人の男兄弟にはさまれて一人だけ女の子だったという意味で一人娘なのである。といってもこれはパキスタンのできる以前のことだ。パキスタンができてからは男の方も一人息子になったからである。

サイヤド・アービド・ラザーはチャプラーの高名な弁護士で、家柄もよかった。マホメットの後継者の血を継ぐとかいうサイヤドだった。手の切れそうなお札の如きパリパリのサイヤドぶりだった。財より血筋を重んじた。

サイヤド・アービド・ラザーは代々の国民会議派党員だった。国民会議派に属するのは、彼で三代目だった。彼の父は州委員会の議長だったこともある。刑務所入りも何度かした。彼自身も県委員会の書記であり、合計すれば九年八ヶ月十二日もの間刑務所にいたことになる。彼は手織り木綿以外、何も身につけようとしなかったがそれも極くきめの粗いものだった。これだけ言えば、彼がムスリム・リーグの政策に絶対反対の立場にいたことはもうお分りいただけたと思う。彼の四人の子供（サキーナーと三人の兄）は、その信条を受け継いでいた。息子は三人が三人ともパキスタン建国に反対だった。三人ともアリーガル大学で学んだ。共産主義者と言われた。幾度となく、ムスリム学生連盟やムスリムの暴力団に殴られた。それでも彼ら三人はパキスタン建国反対を唱え続けた。だが、P・C・ジョーシー率いるところの共産党が1945年、ムスリム・リーグと協定を結ぶことを表明すると、三兄弟はいたく失望した。

長男はこうも言ったくらいだ。「ムスリム・リーグがほんまにムスリムを代表しとるんやったら堂々とパキスタン万歳のスローガンを掲げりゃええねん。君ら同志には、ふさわしいわ。」

彼のうけた失望の痛手は余りに大きく、政治からは手をひき、父と共に弁護士業をやり始めた程だった。

アービド・ラザーは1945年の選挙で、国民会議派の公認候補として出馬した。大敗して、供託金は没収された。彼の供託金が没収されるなどとは、尋常のことではなかった。彼はムスリムの間でも大きな支持を得ていたのだ。しかし、当時ムスリムはパキスタンを建国するか否かの決断を迫られていた。その上、仮にパキスタンができたとしてもチャプラーにできるのではないという事を一般のムスリムは知らなかった。パキスタン移住のためには、故郷チャプラーを捨てねばならない事も知らなかった。幾世紀もの歴史をもつ住み慣れた道、なつかしい町並、古くからある畑や穀物置場を、捨てねばならなくなるのだ。これをムスリムの大衆が知っていたら、多分サイヤド・アービド・ラザーは落選せずに済んだろう。靴を投げつけられずに済んだろう。ヒンドゥーの奴隷と罵られることもなかったろう。

「ホーリー祭なんぞ祝うとる、あのサイヤド・アービド・ラザーに票を入れるつもりでっか？あれの娘は毎年二人のヒンドゥー野郎にラーキー（兄弟姉妹の契りを確認するヒンドゥーの祭りに手首に結ぶひも）を結んどるんで

っせ。回教徒としての誇りがのうなった人はそうなさったら宜しい。けど最後の審判の日にアーン・ハザト（神の使徒）にどの面さげて会いはるんやろね。そりゃ、サイヤド・アービド・ラザーが学のあるお方やいうことは知ってます。それに比べてパハルワーン・アブドル・ガフール氏が学のない武骨もんやということも知っとります。けど思い出しても見て下さい、アーン・ハザトはアラブの教養ある人やのうて、無学なビラールの黒んぼラジーのアッラー・ターラー・アナホー（原註：寺院から信者に祈りを呼びかける役目だった。アビシニアの出。）を自分のモスクのモーワッジン（原註の役目のこと）にしたんやさかい。皆さん方どっちを支持しはる？ビラールの無学か、アブー・ジェーハル（原註：アラブの一学者。回教徒にならなかったため、ムスリムは彼をアブー・ジェーハルと呼んだ。）の博学か？」

アリーガルのある青年がこう呼びかけると、チャプラーのムスリムはもうころりと参ってしまい、パハルワーン・アブドル・ガフールを議会の「モーワッジン」に選ぶ決心を固めた。それでも尚、サイヤド・アービド・ラザーは彼らに訴えかけた。

「皆さんはパハルワーンに投票なきるおつもりのようや。しかしわたくしは主義を貫くため闘っとるのです。…」ここで一つ靴が飛んできた。「お有難うございます。しかしどうか、ムスリム・リーグがごまかしやということを分っていただきたい。…」

「ヒンドゥーの犬め！」群集の反応はこれだった。

「わたくしは神の使徒やありません。大衆は神の使徒にもくずを投げたいうことやったが…」

「おまえ自分をアーン・ハザトと一緒にしとるんか！」青年が一人憤激して立ち上がった。国民会議派やジャミーアト党の支持者は萎縮してしまった。そして、サイヤド・アービド・ラザーが目をさましたのは病院の中だった。

サキーナーはその日ジンナーに対して思いきり非難の言葉を浴びせた。

そして父アービド・ラザーと兄二人の亡骸の傍まで来ると、その時ついた悪態のひとつひとつが頭をよぎった。選挙期間中の演説の声がまた聞こえてきた一生命と尊厳を！生命と尊厳を！…

マヘーシュは幾度となくサイヤド・アービド・ラザーに言っていた。世相が険しい、家に来い、と、ここじゃ何が起こるやらも分らぬ、マヘーシュにはサキーナーがラーキーを結んでおり、彼の父はサイヤド氏と親しい友人の間柄だった。

「わしがムスリム・リーグに反対したんは、国が独立したとき、身の安全をもとめてお前の家に逃げ込むためやったんか？」サイヤド氏の返事はこうだった。

「おじさん、そんな議論はいつでも出来るやないですか。」マヘーシュが言った。

「いや、今こそせにゃならんのや。」

「ならせめてサキーナーだけでもここから離れさせたって下さい。」

しかし、サイヤド氏はこれにも応じようとしなかった。つい先日、サキーナーの結婚式をあげたばかりだったのだ。サキーナーは今やいわばイッファンからの預り物だ。

「わしは向こうに言うてあるんや。サキーナーを迎えに来てくれとな。ラクナウじゃ暴動は続いとらん。」

しかし息子達三人は無理やりサキーナーをマヘーシュの家にやった、サキーナーを送り届けて戻って来る途中、マヘーシュは路上で殺害された。マヘーシュの殺害は、ミール氏には知らされなかった。他の者の死は続々と知らされたのに。

町は非常に険悪な様相を呈していた。どの人も孤立化していた。通い慣れた路地が蛇になって這い廻り、鎌首をもたげて人の足音を待ち構えていた。足音は今までのようでなくなった。足をおろす音が全く聞こえず、誰もが急ぎ足で通り過ぎた。背後から襲われはしないかと、人々の背や肩に目が生えてきた。影にさえヒンドゥーとムスリムの別ができ、皆、己れの影におびえながら、逃げるようにして歩いた。破れ果てた夢の断片はガラスの破片のように足裏につきささり、しかもその痛みを声に出すことはできなかった。どこかで誰かが声をききはしないか一自分が今この路地にひそんでいることを知られはしないか、それをおそれた。

アラビア語のアードミー（ひと）。

サンスクリット語のマヌシュヤ（人間）。

どちらも同じ意味だ。それなのになおもこの二つの言葉の響きはぶつかり合い続けている。マヘーシュはマヌシュヤだった。アードミーが彼を殺した。サイヤド・アービド・ラザーはアードミーだった。彼をマヌシュヤが殺した。

三男はデリー在住だった。それで上の二人の息子は父親に、今外に出ては危ないと説得した。しかしサイヤド・アービド・ラザーは言い切った。

「今こそ家の外に出んならんのや。」

「お父さん、なんできいてくれへんの。」長男が苛立って言った。

「お前は分っておらんな。」サイヤド・アービド・ラザーは答えた。「わしが獄に入ったんはこんな日を迎えるためやったとでも言うのか。お前たちは殺されるだけのことかも知れんが、わしはヒンドゥスターンとパキスタンの街中でなぶりものにされとるんじゃ。わしの夢は辱しめを受けておる。お前たちは靴の花束を投げてもらわなんだな。わしにそれを投げつけたのは見ず知らずの他人やなかった。といって、連中の言うことは正しかったか？この問いに答えてもらわにゃならん。それには家から出にゃならんのや。」

言葉通り彼は家から出た。長いアチカン、いつもの黒いイラン帽。右側に長男、左側に次男が付き添った。ゴーリーシャンカル氏は自宅の窓からそれを目にした。

「サイヤドさん！」氏は叫んだ。

前方からデモ隊のような一団が近づいて来ていた。ゴーリーシャンカル氏は銃をとって飛び出した。しかし氏が行くまでに、ことは終っていた。サイヤド・アービド・ラザーのイラン帽が溝の中にころがり落ちていた。

「貴様、この人を知っとるんか！」氏は一人の若者の胸ぐらつかんで言った。「この人はサイヤド・アービド・ラザーや。」

名前が何かの魔力を発輝して帽子を溝からサイヤド氏の頭に舞い戻らせ、氏が笑いながら起き上がってくれるのではないか…ゴーリーシャンカル氏はそんな風に思った。しかし、勿論、何も起こらず、帽子は溝の中に落ちたままだった。

「これがアービド・ラザーだというのに、まるでこの人は神さまやと言わんばかりの口ぶりやないか。」

「いや、神様はお前さんの方や。」

ゴーリーシャンカル氏はうなだれて家に戻った。叱りつけた若者は、他でもない同じ町の者だった！

アービド・ラザーが殺されたという噂は、燎原の火の如くひろまった。チャプラーは静まりかえり、暴動は止んだ。これが、アービド・ラザーの問いに対する答えだった。若者に不利な証言をゴーリーシャンカル氏がしたこともその答えだった。

しかしサキーナーは、パキスタンに投げつけた呪いの言葉しか頭に浮かばなかった。その翌年、マヘーシュの弟のラメーシュには、ラーキーを結ばなかった。買ってはみたものの、イラン帽がちらつき始めた。そのラーキーは溝に投げ捨て、デリーから直接パキスタンに行った兄に手紙を書きにかかった。

…どうしてラメーシュにラーキーが結べましょう？パキスタンに行くことをイッファンは承知しないので困っています。この国にはもう憎しみしかおぼえません。

憎しみ！

何と奇異な言葉だ。このただひとことが、あの民族運動の結果なのである、ベンガルやパンジャブ、それにウッタル・プラデーシュの革命家たちの屍体の代価は、ただの一言一、憎しみなのだ！

憎しみ！

疑い！

怯え！

この三艘の小舟に乗って私達は川を渡っている。この三つの言葉こそが種まかれ、刈り取られていく、乳となって母親の乳房から子供の喉に飲み込まれていく。閉じた心の扉のすきまから、この三つの言葉がのぞいている。浮かばれぬ霊のように裏庭をさまよっている。こうもりのように翼手をばたつかせている。夜の沈黙の中、ふくろうのように気味の悪い声を出している。縁起の悪い黒猫のように道を横切っている。やりて婆のようにこちらの話をあちらに、あちらのをこちらにしたりしている。ならず者のように、乙女のような夢をからかい、雑踏の中からさらってゆく。

憎しみ、疑い、怯え。この三つの言葉は三つの悪魔だ！

「うちは誰もかれもヒンドゥーにはぞっとするわ。」サキーナーが言った。

「そりゃ結構、旦那は、そちらさんと俺との間を疑うたりできんわけやからね。俺かてムスリムがとくに好きでもないし。」
「なら、なんでうちに来はるん？」
「ここは俺の友だちの家やからね。」
友だちだって！それじゃ、この言葉は、まだ生き続けているのだ！

10

トーピーは次男であった。小言を聞かされたり、ムンニー・バーブーのお古を着たり、バイラブのわがままをじっとこらえたりすることには慣れっこになっていた。ところがアリーガルでは、小言など言う者はなく、彼が何をしようと何をすまいと、とやかく言う者は誰もいなかった。だが、正にこの故に、何人か、そして沢山の人と友達になったあとも、孤独感からのがれられなかった。その孤独の状態はもうぎりぎりのところまできていた。
だから、イッファンとの再会は彼の心をよみがえらせた。そもそもの始めに、サキーナーがしかりつけてくれたので、彼の二年間の心の渇きはいえた。それからは、時間がありさえすれば、イッファンの家で過ごすようになった。イッファンがいようがいまいが、トーピーはやって来た。イッファンの本をひっくりかえしては、サキーナーに叱られる。五才のシャブナムにヒンディー語を強いようとしては、サキーナーに文句を言われる、という具合だった。
イッファンの家にあんまり足繁く通うので、とうとうシャムシャド市場や職員クラブ、カフェ・ド・プーンスやカフェ・ド・アリフ・ライラーでも噂がたちはじめた。
大学はひとつの小さな村みたいなものである。市街地から離れた別世界だ。ムスリムの大半がパキスタンにいることすら、大学の大抵の者は忘れている。カトプラーの向うはヒンドゥスターン，カトプラーのこちらは大学。だから誰もが話の種を捜し合っている。どこそこの奥さんはだれを見るとにっこりするぞ、とか、どの学生はどの女学生に気があるとか、次はだれやかと…。
セックスに、フラストレーションに、ファナティシズム！
「マウラーナー・ムハンマド・アリーはこの部屋におられたんやなぁ。」
「ハスラト・モーハーニー，リアーカト・アリー，アユーブ・カーン大統領，ラーラー・アマルナート，ゴウス・ムハンマド，シャクール，タルアト・マフムード…もう、ここで学ばなかった人などいない言うことですね先生。」
「いってみりゃアリーガル大学はひとつの文化なんやね。」
「マジャーズも相当の放蕩をしたんでしょうね。」
「ここを出とらん者は田舎者や。」
「ここじゃビハール人すらひとかどの人間らしゅうなるもんな。」
「ナルギスの奴を見いや、ラージカプールと別れた思たらスニールダッタとくっついたで。」
「トーピーかてなかなか隅に置けんよ。」
「なんちゅうこっちゃ、ムスリムの娘らがヒンドゥーの奴らんとこにどし

どし押しかけて結婚する時代が来たんやなあ。」
「きのどくにムスリムには青天の霹靂や。」
「トーピーよりましなら誰かてそうなりうるわ、さあ行くか、礼拝の時間や。」
イッファンは噂をきいて聞かぬふりをした。サキーナーはトーピーを連れて映画まで観に行くようになった。しかしトーピーは次第に以前の快活さを失い、ついにある日堪えがたくなってこう言った。
「おい、この大学もえらい下らんとこになったもんやな。」
「なんで。」
「もう俺、ここに来んようにするわ。」
「なんでや。サキーナーに恋でもしたんか？」と、サキーナーがこう言った。「失礼するわ、うちにはもうこんな男しか残っとらんの。」
「トーピーのおっちゃん、おっちゃんは…」シャブナムが口をはさんだ。
「こいつめ、こんどトーピーやなんて言うたら承知せんぞ。」
「トーピー、アラーの神が見たはる、娘に悪い言葉使わんとって。サキーナーがあわれな声で言った。
トーピーは、「あんたらの神さんのことなんか、なんで俺が考えんならん？アラーの神ならとうにパキスタンへ追い出したけど。」と言い返す。
すると、シャブナムは、「おっちゃんはヒンドゥーや。」と言って、ヒンドゥーであることがまるで何か愚劣なことでもあるかのように、手を叩いて囃した。
「誰がそんなこと言うたんや？」
「今日学校で友達が言うとったわ、うちとこのお母ちゃんはトーピーにひっかかったんやて。それにトーピーのおっちゃんはヒンドゥーや、て。」シャブナムは両手を打って囃し立てた。「やーいおっちゃんはヒンドゥーや。」
部屋にいた皆は押し黙った。トーピーは怒りで顔を紅潮させた。イッファンは気を滅入らせた。ところがサキーナーは笑い出した。「ここらの人は蔭口ひとつ言えんときとる。そんな事きいたらトーピーの頭はおかしうなってまうわ。ほんでどっかの娘さんに、愛シテマス、なんて囁いて蹴り上げられるんが落ちやわね。」
「今日はラーキーの祭りや。なんで俺にラーキーを結んでくれんの？」
ラーキーやて？
マヘーシュさん！ラメーシュさん！
ああ、ラーキーやなんて！
「うちはヒンドゥーのひとにラーキーは結ばへん。」
「ジャルガームの奥さん。ラーキーはヒンドゥーの結ぶもんやのうてなんですの。」
「主人の名前もろくに発音できへんの！ぶっとばすよ。」
シャブナムは抱いていた人形の耳もとにささやいた。
「おっちゃんはヒンドゥーやねんよ。」

「けど…。」
「けどもへどもやめてくれへん？」サキーナーは怒った。「近所の口の悪いのが、あんたとうちの仲をあやしんどるからいうて、ラーキーを結ぶ理由なんかになる？うちは毎年ラーキーを買っては溝に投げ込んどるんやからね、」
「そんな事をして、マヘーシュさんがお前を守ってくれたことや、ラメーシュさんはわざわざラーキーを結んでもらいに訪ねてきたことを忘れてしまうんや。」イッファンが口を出した。
「そうやね。ほんでも父のイラン帽が溝に落ちとったんが、うちの目には焼きついてしもうとる。」
「もう、まるで俺が溝に投げ捨てたいわんばかりやないか。親父さんの帽子を。」鼻白んだようにトーピーが言った。
「ええうるさい。あんたかてヒンドゥーでしょうが。」
「ほう、そんなら俺を溝に放り込みゃいい、俺かてトーピー（帽子）や。そんでお相子になる。」
サキーナーはその場を立った。イッファンは訳もなく本をあちこちひっくり返し始めた。トーピーは嘆息を繰り返した。このムスリムには好きになる値打ちもない。
「イッファン、あの奥さん連れてパキスタンに行ってしまえや。」
イッファンは答えなかった。もしトーピーでなくて誰かムスリムであれば、多分人はこれ程取り沙汰しないだろうに、と彼は考えていた。
ここでもまた、ヒンドゥーや！
これからもこの言葉は僕らのあとをいつまでもついてくるんやろうか？
トーピー、お前はなんでヒンドゥーなんや？それに僕はなんでムスリムなんや？なんでや？この言葉にしてもえらい変わっとるな。答を人に強要しよる。だが、答どころやない人かておるやろ？そんな人はどうしたらええんや？
イッファンは本を放り出した。
「お前はムスリムを憎んどる。サキーナーはヒンドゥーとくればいやで仕方がない。僕は…僕は多分こわいんや。バルバッドラ、僕らこの先どうなるんやろう？僕の恐れや、お前やサキーナーのもっとる憎しみの気持ちは、絶対変わらんといえる程の不易の真実なんやろうか？：歴史の先生は明日、何を教えるんや？僕がお前をこわがり、お前が僕を憎んどったなんていうこの現状をどんな風に説明するんや？そのくせ、友達同志やったなんてな。　僕はなんでお前を殺さんのや？お前かてなんで僕を殺ってしまわんのや？何が僕らをそうさせんのや？とてもやないが僕には歴史なんか教えられん。学校を辞めようと思う。」
「そりゃあんまり利巧なこと（アカルマンディー）やないな」
「けどな…。」
「おい！」トーピーは彼を遮って言った。「アカルマンディー言うた時にお前なんで俺をたしなめんかったんや？（これはアラビア語系の語だが、トーピーは正しく発音しなかった。」

イッファンは相好をくずした。

二人は口を閉じた。議論せねばならぬことなど、もとよりないのだった。イッファンは初めて自分の恐れが何なのかを考え始めていた。同様にトーピーも初めて自分の心中の憎悪の正体を見つめた。友情が偽りなのか恐れが偽りなのか？友情が偽りなのか憎悪が偽りなのか？…

イッファンは、「それにしてもムスリムに働く口がないんはなんでやろう？」と、まるで長いことヒンドゥーとムスリムの問題を論じてきたような調子でたずねた。

トーピーは、「ムスリムの心にやましいところがあるからや。」と応じる。

「何がやましいんや？」

「パキスタンいう国をつくってもらっといて、ムスリムはインドにどの面さげて住むんや？どんなムスリムも心の窓はパキスタンの方に向いて開いとる。」

「ほんならなんで僕はパキスタンへ行かなんだんや？」

これにはトーピーも答えようがなかった。その通りや。このイッファンはなんで行ってしまわなんだんや？四千五百万を数えるムスリムが、インドで何をぐずぐずしとるんや？隣りのカビール・アフマドの奴はなんでまた家を新築なんかしたんや？…

「けどムスリムはパキスタンのホッケー・チームが勝ちゃ喜こぶやないかなんでや。」

「それはヒンドゥスターンのホッケー・チームにムスリムがなんでおらんのやいう質問にもできるな。ムスリムはホッケーのやり方を忘れてしもた訳か？」

「そうやない、ムスリムが、試合になるとパキスタン・チームと組んでしまうんやないか、いう恐れがいつもあるからや。」

またこの言葉、恐れ！

とすりゃこの恐れいうものは双方にあるわけだ。憂鬱は一段と深まり、暗闇は一層濃くなった。この恐れから逃れられる、何かええ知恵はないもんやろか？…

「しかし対パキスタン戦に出してもらえんのに、パキスタン側に寝返りをうたんいうことをムスリムはどうやって証明したらええんや？」

「ムスリムの忠誠を試すためにわがインド・チームがむざむざ金メダルを逃すこともないやろ。」

「なら他にどんな知恵がある。」

「ホッケーやのうて戦争してると仮定してみ。仮にインドへの愛国心を試すためにムスリムををわが軍に入隊させるとするで。ほんで奴ら戦場でパキスタン側についたとする。ほな、この試みは誰にとって一番高うつくんや？」

この論理にトーピーは至極満足した。この疑いこそ正当なんや、この憎悪自体正しいんや。せいぜい暴動が継続して起こるだけや。百人や二百人の人間が殺されるだけや。…

「二百人足らずの人の命を救うために俺らは独立を危機にさらすことはで

きん。」
「そんで？」
「それだけや。俺がムスリムを引受けとるとでも言うんか？」
トーピーは癇癪を起こした。彼は、イッファンに苦り切っていた。こいつがムスリムでなきゃこんな厄介な問いを口にすることもないのに。……
この問いという奴は俺たちを放置してもくれへん。人は死なら克服できるが問いには克てへん。こいつは尾っぽの先にくっついて離れやせん。…
イッファンは、「もしムスリムがそんなに悪どいんなら、なんでお前は、そんなムスリムのおる大学に学びに来たんや？」とたずねた。
トーピーは、「この大学はムスリムだけのもんか？」とやり返す。「中央政府から出る助成金にゃ俺らヒンドゥの税金かて入っとるやろが。ムスリムはどいつもこいつも売国奴や。」
「そうやろか」サキーナーが入ってきた。
「うちの父も売国奴やった言うん？」
「奥さんは何かといや親父さんを引合いに出す。まるで南無阿弥陀仏みたいなもんや。どっちを向いてもおいでになる。暴動じゃないんや。」
トーピーは我を忘れて言ったものの、あわてて口をつぐんだ。「ねえさんごめん！」
彼はそそくさと立上り、暇乞いを告げた。帰り際にシャブナムの頬にキスしてやることも失念した。もし彼がシャブナムにキスしたとしても、トーピーの黒い色が移りはしないかと、シャブナムはすぐ頬を拭っていただろうが。
シャブナムは「トーピーのおっちゃんは、なんであたしにキスしてくれんかったん？」と母親にたずねた。
「頭がおかしうなったんやろ。」
シャブナムは、翌日学校にいくと、級友にこう話した。うちのお母ちゃんがね、トーピーおじちゃんは頭がおかしうなったって言うてたよ、と。
皆は家に帰るとそれぞれ母親にその話を伝えた。そして噂は尾ひれをつけて広まった。……
（つづく）